

宵闇ハイスクール

カミカミュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私はこの世界で目が覚めた。幻想郷ではない世界。宵闇の妖怪はこの世界どのように生きる。

私は自由に生きてやる。

EXルーミアがハイスクールD×Dの世界にいたらって話です。  
るみや「基本適当に過ごしてもなんとかなるでしょう」

癒しと可愛さを求め、原作キャラを弄りながら色々やらかすお話。

誤字？脱字？感想のところで言っちゃってください編集すると思うんで。

矛盾？生暖かい目で見つめながら納得しちゃってください。納得できなきや感想で。

感想の数を稼ぐとか言わない、人聞き悪いでしょ！8割方本当だけれども！

感想はできるだけ返信するので、普通に感想、指摘、批判。まあ、何でも大丈夫です。

お気に入りや評価ありがとうございます！

ただいまへ更新停止中ゝ…

目次

プロローグ

1

1話

4

2話

7

3話

11

4話

16

5話

20

6話

25

7話

32

8話

36

9話

45

10話

51

11話

58

12話

70

13話

78

14話

89

15話

109

16話

119

17話

127

18話

135

19話

146

20話

154

21話

161

22話

172

23話

182



## プロローグ

駒王学園への道のりを一人の少女が歩く。

少女の眼は血のように紅く。

髪は月光のように輝く金色のロングストレート。

トレードマークに左側頭部に赤いリボン。

まだ幼さが残る顔立ちだが彼女は誰が見ても美少女だといえる。

逆に胸は年相応の平均的な大きさ。

駒王学園の制服に身を包み少し不機嫌そうに歩いていた。

「うう…太陽がまぶしいわ…」

少女ことルーミアは輝く朝日にゲンナリしながら歩を進める。

「大体なんで私が学校なんて行かなきゃいけないのかしら？」

ボソツと呟きながら2ヶ月前に自身に訪れた現象を思い出す。

＋＋＋＋＋  
＋＋＋＋＋  
＋＋＋＋＋

「あれ？私いつの間に寝て…」

ベッドから身を起こし、少しぼやける頭を左右に振り覚醒させる。

そこはわたしが知らないはずの部屋。

しかし、知識としてルーミアの頭の中に流れてくる情報は自分がこの家の主で、1週間後に駒王学園に通い始める生徒だということ。

ご丁寧に全く知らないはずの現代社会で生きていく知識まで流れてくる。

さらに言うなら自分の容姿をだいぶ変わっていた。

肩に届く程度のボブだった髪は腰に届く程のロングに、服装は変わらず白黒の洋服を身につけ、スカートはロングである。左側頭部の自身を封印しているはずの赤いリボンは妖力や魔力を隠蔽するものに

変わっている。

簡単に言うなら幼い私から封印される前の自分に戻っていた。

（完全に全盛期の私だ。思考能力も戻っているから冷静に物事を判断できている。けどどうして？私は幻想郷にいたはず…）

異変の可能性を考えたが、異変だけでは片付けられない事が多すぎる。こんな特異な異変なら八雲紫の接触が必ずあるはずだが今の所その気配はない。

幻覚に囚われている訳ではない。神的なものが関わっているのか？そこまで考えると流れ込んできた知識の中に現代知識とは別の天使、墮天使、悪魔の情報が出てきた。

この知識が出てきた時点で確信する。

ここは”別世界”だ。

幻想郷は、幻想的な生物妖怪、妖精、魔女や神などの人外が忘れられて幻想となって来る場所、そこが幻想郷だ。

なぜ隠れ住んではと言え外の世界でほとんど失われ「幻想になった」奴らがこんなにいる？

”平行世界”、”異世界”言い方は別にもあるだろうが、ここは間違いなく私がいた世界とは全くの別物だ。

「戻る方法は」とここまで考えた時点で「別に戻る必要ない」という考えが出た。

別にあちらの世界に執着する理由など無いからだ。ならばこの世界で生きるのも面白いかも知れない。

（こんどは封印されない程度に、自由に生きてみようかな…）

ならば様子見て1週間後に通う駒王学園で過ごしてみるか…。寺

子屋に通っていた記憶が思い出されるが幼い私の記憶のせいでバカやっていた思い出しかない。

机に置かれた駒王学園のパンフレットが目に入る。

元は女子高というだけ女子の数の方が多いようだ。中々に難しい所ではあるようだが幼い私と違って、全盛期の私ならスペックはだいぶ違う。知識に勉強に関するものもあるこれをしっかり理解すれば問題はないだろう。

まあ、楽しく過ごしてみよう

## 1話

私の家は駒王学園から10分程度の距離にある。

一応バレると厄介なので結界を仕掛けた。

この結界には防護、認識阻害、修復、防音の効果が掛けてある。

今の私にできる最高の結界だ。普通にしてれば2万年以上は持つし、核ミサイル級の攻撃だろうと数十発以上に耐えられるし、結界や家の中のものも傷ついても自動修復機能付きの万能結界だ。人間はもちろん人外の連中にすら気づかれない程の認識阻害。

効果は実証済み。(認識阻害を自分以外にかける設定を間違えて自分にも掛けてしまい3日間家を探して彷徨ったのは内緒だ)

そんな家への帰宅途中、人気がない路地に懐かしい気配がして気が付いたらそちらに歩いていった。

そこには黒猫というと少し違うな、猫又がそこに傷を負い倒れていた。

少し考えたがとりあえず連れて帰ることにした。

治療用の魔法陣に乗せ、傷が治ったら私のベッドに寝かした。少し眠気が来た私は猫又を抱え眠りに就いた。

＋―黒歌 side―＋

一瞬、ほんの僅かに気を緩めた時に追手の攻撃を受けてしまった。傷は浅かったが攻撃を受けた時に頭を強く受けたらしく、追手を振り切った先で気絶した。

意識が落ちる、暗くなる意識の中で死を覚悟した。でも目が覚めた時には傷は治って金色の髪をした少女が私を抱きしめて眠っていた。しばらくそのまましていると、少女が目を覚まして一言。

「目が覚めた？傷の具合はどうかしら？猫又」

少女から一瞬で離れて人型に戻り、警戒する。

なぜわかった？ただの少女ではないのか？そんな疑問が頭に浮か



んでいると少女は寝そべったまま。

「久々に妖怪の同類に会ったのだ、そう警戒しないでよ」

同類？同じ妖怪の類というには少女から何も感じない。私の疑問を感じとったのか少女は。

「ああ、ごめんごめん。隠蔽してるからわかんないよね」

そう言いながら、頭のリボンを解く。

解かれたリボンは頭の上に輪つか状になりくると回っている。

そして、膨大な力の塊が少女から放出された。

怖い、圧倒的な存在。自然と足が震え、冷や汗が流れる。

でも、この人なら…

「お願いにや。私を匿って欲しいにや!」

ダメ元で頼んでみる。今の生活を続けるよりこの少女の元にいるほうが確実に安全だと判断した。

「ん? いいよ」

「ふにや?」

+ 黒歌 side out +

なんか、必死な形相で頼まれたけど別にかまわん。同じ妖怪だしペットも欲しかったからちようどいいでしょう。

学園ではストレスが意外と貯まる。

同じ年からお姉さまと呼ばれ。

年上からもお姉様と言われ。

変態三人組をいちいちめているのにも関わらず日が経つごとに行動が悪化。

休み時間はクラスメイトに授業で分からなかったところを質問され。

朝は靴箱にラブレター。

机にもラブレター。

放課後は告白で呼ばれ。

男子からの変態的な視線に耐え。

なぜか女子からも最近そんな視線が来出して頭を抱えている。

最近、私物がなくなることも多い…。

嗚呼：癒し、癒しが欲しい…。

この後、黒歌をベッドに引きずり込んでめっちゃナデナデした。

## 2話

黒歌が家族となつて月日が経つのも早く、私は2年生に上がった。まさか、また変態3人組と同じクラスになるとは…面倒だ。

こいつら、猥談やエロ本持ち込みなんかしなければ普通に好青年なのだ。

モテないモテないと叫んでいるが、変態行動をやめれば自然と寄ってくる女子もいるだろうに。

その中の兵藤一誠は人間にしては変な気配はするものの、大人しくしていれば普通にモテそうだ。というか、寄ってくる女子を大人しくしていれば君に紹介したつていい。だから覗き行為を平然と行うのをやめてはくれないだろうか？

そういえば最近、蝙蝠とは違う匂いがしだした。

可能性とすれば墮天使だが、やけに兵藤一誠の周りに気配を感じるのだ。

少し注意したほうがいいだろうか？

放課後の告白を断るとようやく帰宅できる。下級生が入つてからは告白してくる人数が増えた気がするが気のせいだと願いたい。家に帰ると黒歌がいつも出迎えてくれる。

「おかえりなさいにや！ご主人。ご飯できてるけど食べるにや？」

「ああ、ただいま帰つたよー黒歌あー…ナデナデさせて…」

「にやひやあー！ナデナデ気持ちいいにやーつて、どうしたのにや？ご主人。また何かあつたのかにや？」

「手紙37通、告白17人、盗難5件、私非公認ファンクラブ200人到達…」

「あ、相変わらずモテすぎだにや、ご主人…」

「日に日に増えていくんだけど、しかも女子の方が数が多いってどういうこと・・・」

「ご主人は性格も容姿もいいし、勉強運動ともに完璧だからみんなが好きになるのもわかるにや。実際私もご主人のこと好きにやよ」

黒化の純粋な笑顔に癒される…黒歌の癒しがないと毎日辛い。

服を着替えて、黒歌が作ってくれたご飯を食べることにしよう。学校でのことを話しながらご飯の感想を述べる。美味しいといえば黒歌の笑顔で癒され。味の指摘をすれば次はもつと美味しくすると意気込む黒歌が可愛い。

ご飯が終われば黒歌とお風呂に入る。綺麗な黒髪を洗ってあげれば笑顔になる黒歌に癒される。でも胸を揉んだりして迫って来るのは少し加減して欲しい。あまり慣れないのだこんな事は。獣の妖怪に比べ闇の妖怪である私には性欲というものが限りなく低く感じる。全く無いわけでないから下の方まで触るのはやめて…。

風呂から上がれば宿題が出ているので済ませる。予習復習をある程度済ませると、全盛期の私の勘を取り戻すために魔術の開発をする。暗殺、防護、精神干渉、殲滅などを作り出して改良するの繰り返しだ。スペカとして使っていた技も非殺傷に留めていた威力を大幅に上げていく。最近では黒歌が使う仙術というものを学んでいるが、コツが掴めると中々に使い勝手良い。

時間は23時。いい時間なので黒歌と一緒に就寝。今日は人型で眠りたいといったので黒髪を撫でながら抱きつき寝る。コラ、お尻を揉むな黒歌。

黒歌がいる我が家が一番の癒しだ。元は追われていた身だが、安心しなさい黒歌を付け狙う敵は殲滅してあげるから。夜行性なせいで夜寝るのは辛い、学校の疲れもあってすぐに瞼は降りた。

次の日の学校で

偶然、目の前を歩いてきた人物に目をつけた。

黒歌と似た匂い、対照的な白い髪。そしてこの気配は……。私は咄嗟に声をかける。

「ちよつと待って、そこの白い子」

「…はい？何ですか先輩」

「猫まゝ」

「っ!?!来てください!」

猫又と言おうとしたら慌てて連れて行かれた。

そういや、黒歌に妹が居るが恨まれているとか言っただ。黒歌の事を聞くのは様子を見てからだな。

連れて行かれた場所は旧校舎にあるオカルト研究部。

白い子は扉を開けて、今蹴らなかったかこの子。

「部長!この人私の正体を知っています!!」

「っ!ちよつと話聞かせてくれるかしら?」

「蝙蝠はあまり好きじゃない猫又のほうがいい」

幻想郷の頃から特にレミリアは苦手意識が強かった。

幼い私の運命弄ってチルノたちの仲を余興ついでに壊そうとしたのだ許さん。

フランはそこまでなかったけど、そのせいか思わず本音が漏れてしまった。

その発言にイラついたのか部長ことリアス・グレモリー、美しくワ

インのように紅い真紅の長髪を持つ「駒王学園の三大お姉さま」の一人である彼女は手に魔力を収束させると、それを投げてきた。

避けてもいいが禍々しい魔法陣や調度品がある高そうな部屋が壊れるので手に闇を集め、薄く円状に伸ばし魔力弾を受け止める。受け止めた魔力を闇に取り入れ分解して散らす。

驚いてはいたが今のである程度冷静になったのか。

「座って話をしましょう」

「少しだけね…」

なんか面倒なことになった気がする…：自分のせいでストレスを溜め込みたくない…：その事好き勝手でできればどんなに楽か…。

### 3話

目の前にはリアス・グレモリーと白い子、いや塔城小猫が座っている。

リアス・グレモリーは私を睨みながら質問してくる。

その程度の睨みは可愛いものよね。封印前の私と戦った八雲紫なんて睨みに殺気を乗せながら、地形が変わるほどの攻撃無数に打ち込んでくるような奴だったから。

しかも私封印するために先代博麗の巫女まで結界仕込みながら攻撃してくるんだものアレに比べればたいしたことないわ。

まあ、両手両足結界で固定されてスキマから隕石落とされたときは死ぬかと思っただけど…。

幻巢「飛光虫ネスト」って紫のスペカあれね今じゃ紫の背後のスキマから大量の高速弾幕が飛んでくるけど、あれって元々私を抹殺するために作られた技だね。

高速弾幕じゃなくて大量の隕石が射出されてたのよ冗談みたいに死ぬる技だったわ。

「で、アナタは一体何者なの？」

「ハッキリ言うなら妖怪。宵闇の妖怪ルーミアと呼ばれていたわ」

正直に答える誤魔化してもしようがないからだ。

「ではなぜ小猫に接触したの？」

「去年まで見かけなかった猫又の妖怪が目の前を歩いてて珍しかったからよ」

私の癒しが見つかった時の感激がやばかった今もときめいている。黒歌が小猫と仲違い？だったか。話聞いたときは、主人を殺した程度の罪しかなかったはずだ。正当防衛、妹を守るためだ黒歌グツジョブ！

てか、生き残っていたら私直々に乗り込んで滅殺していた。

後々罪の撤回を冥界に乗り込んで説得（物理）しに行こう。冥界つてどう行くんだっけ？幻想郷なら飛んでいけたけど、今度黒歌に聞か。

「…アナタは私たちの敵？」

「違うわよ。それなら接触じゃなくて監視を優先するわ」

むしろ愛でるわ！黒歌と小猫仲直りさせて二人同時に愛でまくりたい！最近ストレスで私の精神がマッハなのヤバイのパネエの癒しをください…。

「…そう、ならアナタの言葉を一応信じるわ。放課後にもう一回ここに来てくれる？私の眷属の子にも紹介したいから」

「わかったわ。これからよろしくねリアス。それに小猫」

「私はあなたの先輩なんだけど…」

当たり前のように呼び捨てにすると不愉快そうに文句を言ってきた。

「あら、これでも私リアスよりも何万倍も年上よ？」

幻想郷が創られる以前のさらに大昔っから存在している私だ。



早々に年上なんていないぞ。

「え？…そうなの？」

さつきまでの凜とした表情はどこかにポカンとした顔で聞いてくる。隣の小猫も驚いているようだ。

「詳しくは覚えてないけど100万を超えたあたりで、数えるのをやめたわ。それじゃあ放課後にね」

律儀に100万歳おめでとー！とか一人でHappy Birt  
hday to me やってて寂しくて虚しくて、死にたくなつたから数えるのをやめたのよね。

呆然とした二人を置いて私は部室をでる。

面白いものが見れたと少し微笑みながら、先ほど闇を出した時の感触を思い出す。

（久々にちゃんと使ったけど問題はなさそうね。全盛期の私は光も操れたから今度実験してみましよう）

クラスに戻るとクラスメイトが寄ってくる。って近い近い息がかかるほど顔近づけないで…。

「月闇お姉さまー！」

私の苗字は月闇となっていた。詳しくは分からないが目覚めた時に生徒手帳を見たらそう書いてあったのでそのまま使っている。これでも意外と気に入っている。まだ、少し呼ばれ慣れてないけれど、暫くすればなれるだろう。

「下級生とどこでナニをしていたんですか？トイレや保健室、空き教

室や体育倉庫、校舎裏や屋上だろうと私は月闇お姉様に体を差し出す準備は出来ています!!」

ゴンツ!

私は頭を机に思わずぶつけた。

最近これなのだ：全学年の女子からよく二人つきりになりたいだとか、私を貰ってくださいだとかのアプローチが激しい。やめてくれそっちのけは多分無い：無いよな? うん、深く考えるのは止そう。

それにしても私たち女の子同士だよな? 幻想郷でも少しばかりそんなの見たことあるけど、ここまで来る子は見たことなかったよ!? 妹紅と慧音見てたらわかるけど：あれ? 幼い私の記憶に明らかなR—18な二人の行動データが：おふ…。

とにかくこの場合は誤魔化そう、そうしよう。

「いや、部活の勧誘されただけだから」 「そんな!」

「お姉様は運動神経抜群なのですから、ぜひ私たちのテニス部へ!!」

「いえ、ここは私たちのバレーボール部へ!!!」

「ちよつと抜けがけはするいわよ! お姉さま私が設立した爆薬研究部へ!!!」

やばい、部活の勧誘なんて言うんじゃないかった。1年の初めての体育があつた時もこんな感じでみんなから誘われてたの忘れてた…。あの時はホントひどかった。妖怪の私の身体能力で逃げるのにしつこく追いかけて罨まで仕掛ける始末。屋根伝いに逃げてて向こうも屋根に登ってきた時はさすがに引いた…。

というか、最後の子はなんて部活創ってるの!? よく申請通ったわねそれ!!

しばらく続いたが授業を始める鐘の音に助けられてその場は何と

かなったのd…って、戻りなさいアナタ達先生困ってるから!!

## 4話

放課後になったのでオカルト研究部へと向かう。

途中で女子生徒から人気が高いといわれる木場祐斗に出会った。

ふむ、改めて見ると確かにイケメンである。

そして、彼からも蝙蝠、いや悪魔と言おう羽が似てるだけで気配は違うのだ、間違われるのもうっとおしいだろうから悪魔とこれからは言おう。

で、えつとうん。コイツからも悪魔の気配がする。行く場所は同じだろうと声をかける。

「祐斗、アナタもオカルト研究部へ行くのかしら?」

「ええ、月闇さんは部長に呼ばれましたか?」

なんだろう、彼が話すと周りに光が散ってる。悪魔のくせになんてこんな爽やかなのかしら?。

「そうなのよ、小猫を猫又って言ったら正体明かせて詰め寄られてねえ」

「!月闇さんは人間ではなかったのですか?」

「ええ、私は妖怪なの。普段から隠してるから違和感無いだろうけど人外よ」

「こんな身近に…おっと着きましたねどうぞ中へ」

「うん、ありがとうね」

扉を開けてもらい中へと入る。

部室の中は子猫と来た時と同じく、禍々しい魔法陣に高級そうな調度品。

ソファーにこの部活の者達が座っている。リアス、小猫、姫島朱乃そして一緒に来た祐斗。

とりあえず正体明かさないとだから…。

「話す前に感知阻害の結界を張るわね」

トンつと足を鳴らせば部室全体に結界が張られ、私が力を出しても外からは感知できなくなつた。

結界に驚いているようだが、こんな簡易結界などで驚いていたら霊夢や紫なんかのキチガイ結界見たら卒倒するだろう。

あいつら息をするかのごとく繊細で強固な結界張るから凄く怖いんだぞ…。避ければ結界。飛べば結界。

全盛期の私が妖力込めた拳で殴ったら片手で出した結界で防がれてダメージまで追加してくるし、結界投げってきた時は眩暈がした。

中級妖怪なら一発昇天の結界投げってくるって…もう、ホント…涙出てきた。

グスツ…さて、私の正体明かしましょうか。

リボンを外せば頭上をくるくる周り、背中からは漆黒の闇の翼が生え、右手に聖者の十字架をを变形させた漆黒の大剣が現れる。

「改めて紹介するわ。宵闇の妖怪ルーミアよ」

＋－リアス side－＋

リボンを解いたあとの彼女を見たとき、最初に抱いた感情は恐怖。それほどまでに目の前の彼女は次元が違う。

溢れ出る彼女の膨大な力は、軽く魔王クラスを超えた量だ。

極めつけは、彼女の持つ大剣、魔剣の類だと容易に想像がつく。

大剣から溢れ出る禍々しい力は私たち悪魔の魂すら容易に切り裂くほどの切れ味があるはずだ。力の波動がビシバシと私たちの肌を叩き、見ているだけで冷や汗が止まらない。

彼女はそんな大剣を肩に担ぎながら、自己紹介をする。

「改めて紹介するわ。宵闇の妖怪ルーミアよ」

宵闇の妖怪…

宵闇は月の出が遅くなる、陰暦16日ごろから20日ごろまでの、宵の暗さだったかしら？詳しくはわからないけど闇を操る妖怪という認識で合ってるはずだ。私の魔力を散らした闇は強い力を感じた。

大妖怪と呼ばれるに相応しい力を持った目の前の妖怪。だが、最初に彼女に会ってから調べてみたがそんな妖怪の記述は全くなかった。

近いと思われるもので「空亡(くうぼう／そらなき)」という妖怪だ。

百鬼夜行絵巻の太陽をモチーフとして、闇と黒雲、炎をまとった巨大な球体として描かれ、闇と妖怪達を支配する非常に強大な存在であるとされる妖怪。

近いだけで確実というわけではないので、可能性の一つとして留めておく。

私たちはそれぞれの紹介と神セイクリッド・ギア器の話をし出すと怪訝そうな表情をして、「なにそれ？」と聞かれた。人外なのに関わらず、そちらの知識には疎いようだ。

というかその大剣が神器だと思っていたのにどうやら違うようだ。本人曰く、教会からパクってきたあとに闇の力を与え続けたら魔剣として変質したそうだ。

真つ向から教会や天界に喧嘩売ってるのに頭が痛くなる。

しかし、大昔の事なので文献にすら残ってるのが怪しいとの事なのでバレることはないそうだが、聖者の十字架をを变形させてるのを見られたらまずい気が…。一応兄様への報告と監視のためにオカルト研究部への入部を勧めた。

しばらく考えていたようだが「これで追いかけるのも終わるかな？恨まれそうだけど…」と呟いていたことは気にしないことにした。

彼女が入部したので良しとしよう。

＋－リアス side out－＋

入部が決定したので、ある程度警戒を解いて貰えた小猫を膝に乗せ、ナデナデして癒される。

さて、家に帰り黒歌に冥界への行き方を尋ねる。

怪訝そうな表情で、どうして行くのかと尋ねられたが黒歌の罪を撤回させに行くと伝えると、泣きながら抱きつかれた。初めての反応にオロオロしていると、どうやら嬉しくて泣いてしまったと。子猫との仲も任せろと言ったら、また泣きながら抱きつかれた。

これは早めに冥界に行く必要が出てきたな。

しかし、冥界に行くには裏ルートか無理矢理か正規ルートの3種類しか無いらしく。黒歌も前の2つでしか行ったことがないらしく、正規はリアスに頼まないと無理そうとのこと。

無理矢理行くかと答えたら、「さすがご主人。躊躇いって言葉がないのにな」つと呟かれた。失敬な、面倒なだけだ。

## 5話

昼休みに部室へ行くと、リアスが誰かと話していた。

お兄様と言ってることから考えるに冥界の親類だと考える。

ちようど私のことも話しているようだから、扉を開け驚いてるリアスからスマホの様な通信機器を取り上げ「10分後にそっち行くから準備してて」と伝え、リアスに返した。

リアスから何か言われたが無視して職員室へ行き、早退すると伝える。もう一度部室へ戻り、説明を要求するのを無視し、リアスの影を踏む。

「影伝い」

この技は闇を操る能力の派生で影を操る能力だ。動きを封じるなど色々と応用があるが、今使った「影伝い」は相手の思考にある最近話した親類の影に転移する技だ。

考えたのはいいが使う機会がなくお蔵入りした技の一つである。

移動した影の向こうには驚きから警戒へ切り替えた赤髪の男が立っていた。

＋＋サーゼクス side＋＋

警戒が必要だという彼女、月闇ルーミアの話聞いていたのだが。少し前にそっちに行くと言われまさかと思っただけ待機していたら、自分の影から出てくるとは思わなかった。

そして、警戒する私を見て、ふむと呟き。

「はぐれ悪魔黒歌について話がある。彼女の罪を撤回願いたい」



そう言い、彼女の主殺しの真相を語った。

そして黒歌は自身が保護してると言う。全て聞いたことで、黒歌について考えた。

実はその話は可能性として上がっていた話でもあったのだ。

彼女の主についての噂には黒いものが絶えず調べに動こうとしていたその前に黒歌の主殺し、そして屋敷が焼き払われ証拠が何もなく、元々強い力を持っていたこともあってSSランクのはぐれ悪魔として手配されたのである。

だからルーミアの話には信表性がある。だが、私たち間での信頼が全くない。ましてや彼女とは今日初めて会ったのだ。

それを見越してか：

「ただで信じろとは言わない。だから依頼を持ってきて、30件までなら受けるわ。難易度は問わないSSランクだろうが何だろうが全部受けてあげる。それで十分釣り合いは取れるでしょ？」

驚いた。そして凄い自信だと思う。

だが、彼女がこちら側につき高レベルの依頼を30件片付け、黒歌の手配の取り消しを望むなら、こちらのメリットの方が高い。聞けば彼女の力は魔王クラスを超えるそうではないか。

これほどの力が悪魔陣営に協力する。それに彼女が居ればリアスのあの件もなんとかなりそうだ。

＋―サーゼクス side out―＋

ふむ、手始めに10件の手配書と依頼書を受け取った。

パラパラっと全部見れば全てにSSの文字が見える。さて、黒歌のために頑張りましょう。

屋敷を出て紙の束を詳しく確認していく。

まず手配書は3枚ある。残りは達成困難な依頼書、主に採取だ。

手配書から片付けることにする。

えーと、主とその眷属たちを虐殺したはぐれ悪魔「ボロス」。下級、上級の悪魔を殺して回り被害は現在109件か。

「索敵のために闇を操る能力から新しく作った”暗霧”を使う。

これは、闇を霧のように散らし索敵と捕縛をする索敵魔術を改良したものだ。

散らした闇はあらゆる影に張り付き情報収集をする。目標を見つけると影から溢れた闇が絡みつき捕縛する。

黒歌に使用した際、影から出た闇が縄のようになり亀甲縛りと目隠しをして捕縛？した。

おかげで「主人はそんな趣味が…でも全然オツケーにやよ！むしろもつとにや!!」いや、ごめんって、まさかあんなふうに捕縛するとは思わなかったんだって。

能力開発の時のことを思い出し、少し落ち込みながら索敵を再開した。

+ | ボロス side | +

今日も悪魔を二人殺った。

殺す瞬間の絶望に歪む顔が忘れられない。

俺にとってあの顔は快感へと変わる。

犯した後には殺すのも中々に楽しい。

これが終われば助けてやるとでも言えば必死になって奉仕してくれる。助かると信じていたあの顔が絶望に染まる瞬間。

ああ、やめられない。今日のは特に良かった。

愛し合っていた男女の悪魔を男の悪魔の前で女を犯し、女の悪魔はそれで彼が助かるならと必死に腰を振っていやがった。

なのに行為が終われば、拘束して女の前で男を徐々に解体していく。男の悲鳴が響くたびに女が涙を流しながら懇願してくるのだ。

「私はどうなってもいいから彼だけは」ってな。男は男で女を傷つけるといえば、「君が助かるなら殺されても悔いがない」だとよ。男を解

体した後、女をもう一度犯しながら首を切り離してやった。

「久々に楽しかった」

「ならば悔いはないな？」

突然の声に振り返ろうとするが視点が落ちていき、地面にぶつかる。

アレなんで倒れてんだ？

目の前が真っ赤に染まっていく。

赤が黒へとととと暗い、いいいいいいぎいいい……

＋|ボロス side out|＋

バラバラになった男の死体と首が切り離された白濁濡れの女の死体がある。

もう少し早ければと、後悔するが遅れてしまったのだ気持ちを切り替える。

墓を作ってやる。元人食い妖怪が感傷に浸るなど言われてしまうだろうが、今の私は今であって過去の私ではないのだ。

食人衝動はだいぶ昔から起きなくなっている。起きないというだけで食べないという訳ではないが……

奥の部屋にコイツの仲間であろう奴らの下品な笑いが聞こえる。

全員男、捕虜になっている奴らはいない。

スツと部屋に手をかざす。

「ダークサイドオブザムーン」

部屋の中が闇に閉ざされる。

実体化した闇が男共を切り裂く。

闇の中では悲鳴が絶え間なく響き。

不可視の闇の中で肉片が舞う。  
次に闇が晴れた部屋の中は真っ赤に染色されていた。

「消えて無くなれクズ共」

## 6話

依頼を受けて今日で五日目。今やつと30件目が終わった。

不眠不休で闇の情報収集に頭を働かせながら同時進行で別の依頼も進めて、やつと終わった。

サーゼクスに報告に行くとき驚きすぎて固まっていた。

影から突然出てきたから驚かせてしまったようだ。

依頼達成を報告、はぐれ悪魔討伐17件、魔物討伐3件、採取依頼10件5日間で全てやりきったが、大した怪我もしていない。せいぜい右腕が消し飛んだくらいだ。あの程度怪我の内には入らん、すぐ再生するし。

服装は制服だとマズイかと思い、幻想郷にいた頃に着てた服を影から引つ張り出してきてたが、傷と返り血でボロボロになってる。

帰りは来た時と同じで、サーゼクスの影を踏んでリアスの所に跳ぶ。

賞金がなんたらとか言ってた気がするが、黒歌が自由になるならそんなものいらん。

あつ黒歌に好きなもの買ってあげればよかったかな？折角、手配が解除されたんだし。

まあ、お金は何故か銀行に腐るほどあったから気にするまでもないか。

＋リアス side＋

ルーミアがお兄様の所に行つてすでに5日。聞いたところ、ある者の手配の撤回に来たようだ。誰かは教えてくれなかったけど、そのためにSSランクの依頼を30件受けてるらしい。

放課後になり部室へ入ると血まみれのルーミアが影から飛び出した。

驚き固まっていると、疲れた寝ると言いソファで寝てしまった。おかしい、SSランクの依頼を30件受けて5日で帰ってきた？確認のためお兄様に連絡する。お兄様も大変驚いていた。まさか30件の依頼全てを5日で完遂するとは思ってもいなかったらしく、少し声が裏返っていた。

依頼の報酬である賞金を受け取ってなかったそうなので彼女に渡すように頼まれた。

彼女は一体誰のためにこんな無茶な事をしたのだろうか？

＋リアス side out＋

1時間程度だろうか浴びた返り血が乾いたことによる不快さで目が覚める。

近くにリアスがいたので話しかける。

「ここ確かシャワーあったわよね…少し借りるわ…」

「え、ええ、どうぞ」

乾いた血のせいで気持ち悪い。しつかり髪と体から血を落とし、血の匂いを魔術で消し飛ばす。少し外が騒がしい気がするな？

影から制服を取り出し着る。影の収納は本当に便利だ。ちなみに私の大剣もこの中にしまっている。

シャワールームから出ると、部活のメンバー4人となぜか兵藤一誠がいた。

＋イツセー side＋

朝のグレモリー先輩との登校。

数々の文句を言われ、気絶した奴までいるという。

そ、そんなに嫌か！俺と先輩が一緒にいるのがそんなにダメか!!?

校門を抜け、学校の玄関で俺と先輩は別れた。

「あとで使いを出すわ。放課後にまた会いましょう」

微笑みながら、そう告げてきた。

使い？なんのことだ？

教室へ行くと最近空席の席が目に入る。

ルーミアはまた休みか…変態行為をしてめるやつがいないと何故か寂しかった。

って、考えていると。教室中から好奇の視線が襲う。

ま、まあ、リアス先輩と歩いてたらこうなるよな。

ゴツ！

俺の頭部を殴る奴がいた。振り返れば涙を流しながら睨む元浜と松田がいた。

「どういうことだ!!」

そう叫ぶ松田。その様子から、何か言いたいかわかる。

叫ぶ二人は。

昨日までモテない同盟だとか、あの後何があったんだとか。

って視線鋭くて怖いぞ二人とも…。

だが、俺はあえて笑ってやった。そして言っつてやる。力強く!!

「お前ら、生乳を見たことはあるのか？」

悪友二人はその一言で戦慄していた。

放課後

「や、べいっせ」

俺を訪ねてきたのはこの学校一のイケメン王子、木場祐斗だ。周りから黄色い歓声が沸いている。うぜえ。

「で、何のご用ですかね」

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ」

その一言で十分だった。

そうか先輩が言った使いとはコイツか。

「…O K O K、で、俺はどうしたらいい？」

「僕についてきてほしい」

イヤー！と女子たちの悲鳴が上がる。うぜえ…ポリウム下げろ。

「そ、そんな木場くんと兵藤と一緒に歩くなんて！」

「汚れてしまうわ、木場くん！あつ、それもいいネタになるかも」

「木場くん×兵藤？兵藤×木場くん？滾る滾るわ!!」

「月闇お姉さまはどうしてこんな時にいないの！私のお姉さまー！！」

黙れ腐女子ども！勝手に変な妄想掻き立てんな!!

了解と返すと、歩き出す木場。早く去りたい。今すぐここから消えたい！

「お、おい、イツセー！」



松田が呼び止める。

止めるな松田これ以上腐女子が近くにいたらオレが死ぬ。

「心配するな、心の友よ。決闘とかじゃないから」

そうだ、心配するな俺は一刻も早く先輩関係なしに離れたいんだ！

「これ！『僕と痴漢と時々うどん』をどうすんだ！」

松田はエロDVDを天にかざす。

俺は天を仰いだ。

連れて来られたのは校舎の裏手の旧校舎だ。

「ここに部長がいるんだよ」

部長？先輩のことか？先輩って部活入ってたのか？

まあ、こいつについて行けばわかるだろう。

目的の場所に着いたのだろう。木場が一つの教室の前で止まる。

オカルト研究部のプレートに首を傾げなくなった。

あのリアス先輩がオカルト研究部というのが…なあ。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

木場が戸を開け、あとに続く。

室内には至るところに謎の文字そして床の巨大な魔法陣なんとも  
禍々しい部室だ。

あと、ソファアがいくつかありその一つに3人が座っている。

今朝、俺と登校したりアス先輩、黒髪ポニーテールのつて、いつも笑顔を絶やさない大和撫子の我が校のアイドル姫島朱乃先輩!?

リアス先輩と朱乃先輩そして我がクラスのルーミアとで三大お姉さまと称されているお方!

そして、もう一人は小柄な女の子。

知ってるあの子も知ってるぞ!

1年生の塔城小猫ちゃんだ!ロリ顔で小柄な体躯で小学生にしか見えない我が校のマスコツト的な存在だ!

ここは天国か…。

ペコリと頭を下げてくる小猫ちゃんに挨拶を返す。黙々と羊羹を食べるその姿に癒されていると、目に入ってしまった。

先輩たちが座る反対側のソファアが血まみれなのに…。

禍々しい部室の中で殺人!?!どうしてこの人たちはこんなに落ち着いてるんだ!まさか俺も殺される!?

そして聞こえてくるシャワー音。

殺されるんじゃないかという疑問なんかが一気に吹き飛ぶ。

見れば、室内の奥にはシャワーカーテン。カーテンに陰影が映っている。

女性の肢体だ。女の人がシャワーを浴びている。

ってシャワー付きの部室なの、ここ!?

キュッ

水を止める音。

カーテンの奥にある女性の裸を妄想してしまう。

「……いやらしい顔」

ぼそりと呟く声

その声の主は小猫ちゃん。

…そうか、いやらしい顔をしてましたか。それはゴメンよ。

ジャー。

カーテンが開く。そこにいたのは最近学校に来ていなかった月闇ルーミアがいた。

## 7話

「おや？悪魔の匂いになってるな一誠」

怪訝そうな顔でこちらを見てくる、もしかして気づいていないのか？

「悪魔？何言ってるんだ。てか5日も学校休んで何してたんだよ」

「少し私情でな。悪人を殺し回ってた」

「ほんとに何してたの!？」

一誠の叫びを無視しつつ。ソファーへ行く。

ソファーは私が浴びた返り血で染まっていたので適当に魔術で消す。

一誠が驚いていたが、まだ悪魔のことを伝えておらず、魔術的なものを見たことなかったからだそう。

リアスの悪魔発言から始まり、一誠が悪魔になった原因が語られた。

鴉どもの匂いがすると思ったら、一誠を殺すために動いていたのか。

なぜ匂いが分かるかだつて？この世界に来て間もない頃に鴉が襲ってきたんだよ。

あつ、いけね影に引きずり込んで今の今まで忘れてた。暗闇の中に閉じ込めてるから精神状態が不安だな…。まあ、かなり長い時間閉じ込めてたから死んでると思うが。

小猫を膝の上に載せ、ナデナデすると羊羹を食べながら気持ちよさそうに目を細める。

可愛い…癒される…この5日間殺伐としすぎてストレス溜まってたから堪らない。

手配書は撤回されたのだ。早く小猫と黒歌を引き合わせて二人同時にナデナデしたい。

…一誠そんなに羨ましそうに見つめてもここま譲らんど。

さて、一誠に鴉が接触した理由だが、一誠に宿った神器が原因のよ

うだ。

「おや、どうやら一誠の神器を発動させるみたいだな。立ち上がり、そして。」

「……いや、恥ずかしくない？」「ドラゴン波！」って吹き出しそうになったわ。高校生にもなつてやるような事でもないでしょうに……。」

でも、左腕が光り出し、赤い籠手が装着されていた。いいのか神器よ。そんなことで発動して。」

「ソレが原因で死んだのか。それでリアスが眷属悪魔に転生させて下僕にしたと。」

「あ、みんなに翼が生えた。って小猫よ、私の膝に座った状態で翼出さないで……。顎にバチンって……。心配してくれる子猫が可愛い。大丈夫よこの程度で怪我なんかしないから。」

そして、自己紹介する流れのようだ。」

「僕は木場祐斗。兵藤一誠くんと同じ二年生ってことはわかってるよね。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

相変わらず彼の周りだけキラキラしてる。いいのか悪魔。」

「……一年生。……塔城小猫です。よろしくお願いします。……悪魔です」

口数少ない感じが黒歌とは正反対だけど、可愛い。猫耳と尻尾はやっぱりあるのかな？

「三年生、姫島朱乃ですわ。一応、研究部の副部長も兼任しております。今後よろしくお願いしますね。これでも悪魔ですわ。うふふ」

こないだ聞きそびれてたな彼女の名前。最後の笑みに、どこぞのフラワーマスターがダブったがS気が強そうね。」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス。」

グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イツセー」

色々と驚いてる一誠が私のことを見て。

「お前も悪魔なのか月闇？」

その疑問は最もだ。だから私は答える。

「宵闇の妖怪ルーミアよ。彼女たちとは協力関係？まあ、そんな感じだからよろしく」

その後は、エロだのハーレムだの叫んでた一誠は「ハーレム王に俺はなる！」と大声で叫んだのでうるさいと蹴っ飛ばしておいた。

一誠の悪魔入りを紹介された次の日。

私は部屋へ行き、小猫を見つけると。

「リアス、少し小猫借りるけどいいかしら」

「私に話せない用事？」

「事が終わったら話すわ。んじゃ、小猫場所を移すわよ」

「え、あ、はい」

困惑する小猫を連れて、近くの空き教室まで行く。  
簡易の防音結界を張り、黒歌の事について話す。

「小猫、お前の姉黒歌は私が保護している」

「っ!?!ね、姉さまが先輩の所に!?!」

「ああ、そして今から話すことは事実だ。心して聞け」

はいっと返事する小猫の声を聞き、私は話す。

主殺しの全容、去年黒歌を保護したこと。そして、私がサーゼクスに頼んで黒歌の罪を撤回したこと。

全てを話すと、涙を流しながら「ありがとうございます…先輩」とお礼を言った。

私は小猫の頭をゆっくりと撫でる。

「色々、姉に言いたいこともあるでしょう。今夜私家に来なさい」

「…はい。ありがとうございます」

次にありがとうと伝えた子猫の目には涙はなく。純粋な笑顔がそこにあった。

部活が終わり、小猫を連れて家に帰る。

今日連れて行くことは黒歌には既に伝えている。

玄関を開けると、黒歌が「白音!!」と叫びながら小猫に抱きつく。

ふむ、小猫の本名は白音か。

二人を私と黒歌の部屋へ連れて行き、二人きりにさせる。

私は先日の疲れが残ってるせいか、リビングのソファで少し仮眠を取ることにした。

次に目を覚ますと、2時間ほど経っている。

二人のことが気になり部屋へ行くと中は静かで、気配を探ると二人ともベッドで眠っているようだ。邪魔するのも悪いと思い。リビングへ戻り、宿題や予習復習をし、ソファで眠った。

次の日の朝、料理の匂いで目が覚める。

黒歌と白音の二人が仲良く並んで料理をしている。

口元が緩むのも仕方ないことよね?

## 8話

+—ある日の黒歌 side—+

ご主人には感謝してもしきれないにや。

私を拾ってくれたことはもちろん。白音といま一緒に仲良く料理をしたり笑い合えるのは全部ご主人のおかげにや。

そんな私のご主人だけど、猫？でそれなりの実力がある私から見ても、次元が違うレベルで強いにや。大妖怪と呼べるご主人だけど、そんなご主人は私と出会う前は力が封印されてだいぶ弱い状態になっていたとか。

どんな化物にや？ご主人封印するなんて並大抵の実力者じゃないにや。

一度、ご主人に聞いたところ

「大量の隕石を放ちながら平然としてるスキマ妖怪と人間のくせに繊細で強固な大規模境界1秒かからず作って、中級妖怪なら即昇天レベルの境界投げてくるような奴ら」

そう語ったご主人の目は死んでたにや…。あれを見るに絶対それ以外にもあるはずにや。

き、気を取り直して別のことも話すにや！

そうそう、ご主人のナデナデは最高にや！あれには全く抵抗できないにや。撫でられると自然と力が抜けてお腹見せちゃうにや。

白音も気持ちよさそうにしてて、動物ならすぐ懐柔されるくらいの破壊力があるにや。

にやふふふ♪

思い出したら撫でて貰いたくなつたにや！

ご主人！撫でてにやー！！



＋―黒歌 side out―＋

＋―イツセー side―＋

最近の仕事であるチラシ配りを終え、部室に戻ると月闇の膝に小猫が座って携帯ゲームをしていた。

「月闇姉さま。野生エ○コが出ましたよ。捕まえてエネ○ロロに進化させて可愛さ部門で出しましょう！」

「いいねー技何覚えさせようか可愛さ部門なら歌うやメロメロかな？いや4番目で3倍アップする尻尾を振るも捨てがたい」

「タマゴ技で騒ぐ覚えさせれば後者がランダムですよ」

「おーその手もあったね。歌う、騒ぐにコンボの尻尾を振ると甘えるで行ってみましょうか？」

月闇の膝の上でニコニコ笑いながら話す小猫ちゃんはとても可愛かった。

最近よくあの笑顔を見るようになった。無表情の小猫ちゃんもいけど、笑顔も可愛くていいね！って…

「なんでポケ○ン談義で盛り上がってんの!？」

@蒼玉&Ω紅玉出てる時代に翠玉やってるよこの人たち！そしてよく可愛さ部門の技そんな覚えてんな!?!やりこみすぎだろ!!

「いや、何少し暇でね。ポ○モンやってるといろいろ参考になる技あつてね。今度ソーラービームでも開発しようかと」

「悪魔に大ダメージの光攻撃開発すんの!？」

「あれ草ダメージよ、それとカツコよさ♥♥♥の通常アピールだ」

「やっぱ詳しいな!?!?てか、こっち側でやったらの話だ!あんな光線悪魔が受けたら死ぬぞ!」

「そこらへんの悪魔なら片手で振じ切れる。光線撃つまでもない」

「片手!?!色々規格外すぎるだろ!!」

「月闇お姉さまにかかれば、下級悪魔なんて蟻同然です。先輩は蟻な m、いえ蟻に失礼ですね」

「おっふ…」

orz となつて落ち込む。それを微笑ましそうに見る朱乃さん。苦笑いの木場。無視してゲームの続きをやる二人。

そんなことをやっていると、リアス先輩が部室に入ってきた。

「何してるのイツセー?そんなところで手をついて」

「いや踏まれる蟻の気持ちにでもなってみようかと…」

「ふふふ、踏んであげましょうかイツセーくん?」

微笑を浮かべながら近づくと朱乃に、「やっぱいいいです!」と慌てて立ち上がる一誠。

「いや、やっぱ美女に踏まれるのもありかも？」と悩んでいるとリアス先輩が声をかける。

「そこまでにしときなさい。イツセー、あなたのチラシ配りは今日で終わりよ。よく、がんばったわね」

笑顔の部長。そうか、俺のチラシ配りも終わりか。

「おおっ！俺も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。両方行くのは難しいから、片方はあなたに任せるわ」

「…よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる小猫ちゃん。

小猫ちゃんの代わりか。それでもいいさ。

チラシ配りに少し泣きが入っていたところだ。

だけど、小猫ちゃん月闇をチラチラ見てて残念そうだ。

そんな小猫ちゃんを月闇は撫でて可愛がっている。小猫ちゃんの手を握りながら微笑む。

魔法陣から部員が離れる。朱乃さんがなにやら詠唱していた。魔法陣が青白く発光している。

「あ、あの」

「黙っていて、イツセー。朱乃は、今あなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

と、部長に言われる。

ほう、俺の刻印。部室の床に刻まれている魔方阵はグレモリーを表すものらしい。

俺たち、部長の眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものと教えられた。

つまり、召喚する者、契約を結びたい者にとって、これが俺たちを表す記号となる。

魔力とやらをの発動もこの魔法陣を絡めたものになるようだ。

先日見た月闇の魔法を見たが中々に便利そうだ。そのうち俺にも魔法が使える機会が来るかもしれない。

部長に手を出すよに言われ、手のひらに転移用の魔法陣が書き込まれた。

木場たちの体にも魔法陣が大小各所に書き込まれており、魔力の発動とともに起動し出す。と説明された。

俺の体にもと言ったが悪魔なり立てだと魔力のコントロールから始めないといけないらしい。

月闇のように魔法を使うのはだいぶ先の話になりそうだ。おっと、そろそろ準備が終わるようだ。

「朱乃、準備はいい?」

「はい、部長」

朱乃さんが魔法陣から出る。

「さあ、中央に立って」

促されて、俺は魔法陣の中央に立った。

すると、青白い輝きからいつそう強く魔法陣が青く光る。

「魔法陣が依頼者に反応してるわ。これからその場所へ飛ぶの。到着後のマニュアルも大丈夫よね?」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行ってきなさい！」

テンション上がってきた！

俺の初仕事！絶対に無事完遂してみせるぜ！

光が更に強くなる。いよいよ瞬間移動か。

最大級の光が俺の体を包む。俺は眩しさに目を瞑り、次に目を開けた時には依頼者の下だ！くー！楽しみだ！

そして――。

一気に――。

瞬間移動を――。

……。

……。

ん？ん？

あれ？移動したの？完了？

「ぶはっ！くくく……」

吹き出す声が聞こえる。

嫌な予感に恐る恐る目を開けてみる。

……。

…部室だ。

あれ？瞬間移動…依頼者さんは？

見れば部長が額に手を当て、困り顔をしていた。

朱乃さんは「あらあら」と残念そうな表情。

木場はため息をついている。なんかムカつく。

月闇はそっぽを向いて肩を震わせている。やっぱ笑ったのテメエか!!

「イツセー」

「はい…」

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」

あ、嫌な予感。

俺の表情を見て、先輩が説明してくれる。

「魔法陣は一定の魔力が必要なわけだけど…。これはそんなに高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」

なんとなく察した

「つまり、イツセー、あなたの魔力は子供以下。いえ、低レベル過ぎて、魔法陣が反応しないのよ。イツセーの魔力はあまりにも低すぎるの…」

お…おふ…

魔法陣の上でorzになる俺。

ええええええ、俺つてそんな魔力ないの!?!つまり魔法陣で依頼者のもとへ行けなのかよ!?

悪魔なのに魔力低いつて…俺、悪魔だよね？

「……蟻以下」

小猫ちゃん…無表情で俺のライフをそれ以上削らないで…。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長?」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。前代未聞だけど、足で直接現場へ行って頂戴」

「はい！って足!?!」

驚愕する俺。飛べなきやそうなりますよね！でもほかに方法ないの!?!はい、ないですよねすみません！

「チャリですか!?!チャリでお宅訪問ですか!?!そんな悪魔いるんですか!?!」

ビシッ。

無言で小猫ちゃんが俺を指さす。小猫ちゃああああああん！キミ、俺ライフ既にゼロだよ！どれだけ決ってくんの!?!

「ていうか月闇！いつまで笑ってんだテメエ!!」

「くふ、くくく。笑った侘びだ。私が飛ばしてやる。感謝しろよ?」

月闇の影からチャリが出てきて押し付けられる。

えっと固まる俺をよそにダンッ！と月闇が魔法陣を踏み、再び光が視界を覆った。

光が晴れると、そこは依頼者の家の前。

「うわあああああん！ありがとうございます！月闇さまあああああ!!」

泣きながら感謝した。

月闇様あんた天使やで。

その日の契約は破談となったが、アンケートに高評価の感想を  
いただいた。



## 9話

次の日、一誠が「月闇様！」と呼んでくる。

なんだ、一誠。貴様も私にストレスを与えてくるのか？

しかし、悪魔の仕事が終わった後は、「部長仕事が終わったによ！」と語尾がおかしい事になっていた。訳解らん。契約先で何があったのだコイツは…。

だが、契約は2度目の破談。アンケートは高評価という。リアクションに困るなこいつ。リアスも困った顔になってたわよ。

さて、今日は部室に行かずにも本でも買いに行こうと思う。一応リアスには言ったから後でとやかく言われることはないだろう。

「はわうー！」

ん？突然の声。

それと同時に背中に誰かがぶつかって来た。

少し踏ん張り、倒れそうになる体を支える。

振り向くと、シスターがそこにいた。

ドジっ子シスターだど!?はっ！イカンイカン。相手はシスター私は妖怪。互いに相容れぬ存ぎ…よく考えたら巫女と酒飲んでドンチャン騒ぎやってたんだ問題ないな。うん。

とりあえず、シスターに声をかける。

「大丈夫か？」

「あうう。すみません…ソイトフェラトムベラスルポウルクォイ？」

「む、フランス語か。ふむ、Comment ça va? Ousieur vous voyagez?」

よく見ると彼女の側に旅行かばんがある。

「いえ、違ふんです。  
Non, il est différent.  
実はこの町の教会に赴任すること  
de moi. En fait, il est ce que ces choses et  
vous aussi cette ville d'être nommés. L'glise  
あなたもこの町の方なのですね。  
de cette ville vous remerciez maintenant  
これからよろしく願います」  
となりまして…

ほう、この町の教会に赴任か。はて？こころへんの協会は廃れたもの  
のしかないはずだが…。

”暗霧”を使い。この町の事ならある程度知っている。その中  
ある教会は何年も前から放置されているはずの協会があったはずだ。  
少し調べるか…。

「少し待ってくれるか？」  
Devons-nous attendre un peu?

この町の協会は既に使われてない  
L'glise de cette ville non seulement  
廃教会しかないのだ。  
il perd l'glise qui ne sont pas d'j. en cours  
d'utilisation. Une fois dire

一度我が家でゆつくりするといい。  
Parce que j'essaie d'outer cette glise de savoir  
私は知り合いに教会のことを聞いてみるから」  
lentement quand la maison.

「本当ですか！」  
Est-ce vrai!  
ありがとうございます。  
M'arrivez.

この町に来てから困ってたんです。  
Et j'ee du mal venir cette ville.  
その…私って、  
Ce… Je je,

日本語うまくしゃべれないので…  
Parce que le japonais ne parlent pas bien…  
道行く人皆さん言葉が通じなくて…  
Pas par les gens vous des paroles qui marchent  
sur la route. et je me demandais  
迷ってたんです」

涙を浮かべながら微笑むシスター。やばい可愛い。天使か。

「そうだ、自己紹介がまだでしたね。  
Il en est ainsi, je auto-présentation tait un alambic.  
私はアーシア・アルジェントと言います！  
Je aia appelle Asia Arrgento!  
アーシアと呼んでください！」  
S'il vous plaît appelez-moi Asiae!!

「私は月闇ルーミアだ。」  
Je suis le Rumia lune obscure.

Permettez-moi de l'appeler Rumia  
ルーミアと呼んでくれ」

私は暗霧を使いつつ、家への道のりを歩く。  
その途中で、公園の前を横切る。

「うわあああん」

その時、聞こえてきたのは子供の泣き声だ。  
どうやら転んだようだ。母親が近くにいるから、大丈夫だろう。  
転んだだけのようだしな。

しかし、私の後ろをついてきたアーシアは子供のそばへ歩いてい  
く。

ふむ、こういうのは見捨てられないようだ。善意ですぐに行ける  
のはいいことだ。

私もアーシアを追い、公園に入る。

O k? I l e s t i n u t i l e  
「大丈夫?」  
de p l e u r e r I l e s t i n u t i l e d e  
男の子ならこのぐらいの  
pleurer autant de blessures si un garçon  
怪我で泣いてはダメですよ」

アーシアが子供の頭を優しくなでる。

言葉は通じてはいないだろうが、彼女の表情は優しさに満ち溢れて  
いる。可愛い。

アーシアは自身の手を子供の怪我を負った膝へ当てる。

次に起きた光景で私は驚く。アーシアの手のひらから淡い緑色の  
光が溢れ、子供の膝を照らしているのだ。

む? 魔力? いや、アーシアは人間だ。それも教会の。魔の力を使う  
には清すぎる。

見れば、子供の怪我がみるみるうちに治っていく。

もしや、神器か? それ以外だと説明がつかない。

天使の笑顔に怪我を治す神器。お主が女神か…。

子供母親はキョトンとしている。まあ、知らぬ者が見ればそうだろう

うな。

「はい、傷はなくなりましたよ。もう大丈夫」

アーシアは子供の頭をひとなですると、私の方へ顔を向ける。

「すみません。つい」

彼女は舌を出し、笑う。

キョトンとしていた母親はアーシアに頭を垂れると、子供を連れてその場をそそくさと去ってしまった。

「ありがとう！お姉ちゃん！」

子供の感謝の声。

「ありがとう、お姉ちゃんと言っていたわよ」

私がそう伝えれば、彼女は嬉しそうに微笑んだ。なにこれ可愛い。

「その力は神器か？」

「はい、治療の力の神器です。神様からいただいた素敵なものなんですよ」

そう微笑む彼女の顔はどこか寂しげだ。

『あなたの信仰心は素晴らしいですよ●●●●！』

…チツ、アホらしい今更あの頃の記憶なんて。

そんな私の顔を見て心配そうにしているアーシア。大丈夫、あなたは心配しなくても……過去の記憶”よ。

「*Il n'est ainsi, en Asie, en me nommer. des amis et moi?*」

「*Par exemple, dites-vous! Je suis heureux!*」

彼女の笑顔が眩しかった。

そして、私も友達ができたことに少し嬉しい気持ちでもある。家に着くとアーシアを少し外で待たせ。

黒歌に事情を話し、猫耳と尻尾を隠してもらおう。それから、彼女を家に入れた。

私は教会を調べてくるといい、外に出る。

暗霧は教会の影を移動している。そして、この気配は墮天使が4人と、人間らしき人物が1人いるようだ。

すぐにリアスへ連絡を取る。

「リアス私よ」

『アナタから連絡なんて珍しい。何かあったの?』

「町外れの寂れた教会に墮天使が4人と人間が1人いる。そして、治療の神器を持つアーシア・アルジェントってシスターがその教会へ行く途中で保護した。何かあるとは思わないか?特に墮天使なんて一誠が殺されたばかりだ」

『確かにそうね……。頼みがあるのだけど』

「なに?」

『その墮天使について情報を集めてくれないかしら?私も墮天使たち

について調べてみるわ。何か企んでるようなら捕虜を一人捕まえてきてくれないかしら?』

「ふふ、いいわよ。最悪殺しちゃっても文句言わないでね」

連絡用のスマフォの通話を切ると、すぐに通話がかかってきた。相手はサーゼクスだ。

『やあ、元気にしてるかい』

「くだらん用事なら切るぞ、ほれ、はよ話せ3秒やる1」ブツツ

プルル

「なんだ?」

『2,3は!?!というか切るの早いよ!話を戻すけど、はぐれ悪魔がその町に入ったみたいだから討伐して欲しいんだ』

「片手間に潰しとく」

『頼りになる言葉過ぎて涙が出てくるね。こんなぞんざいに扱われたのは魔王n』ブツツ

よし行くか。

## 10話

廃教会にいた墮天使たちの情報はすぐ集まった。

防音も何もない教会内で普通に喋っているのだ。馬鹿すぎる。

レイナーレ：痴女の墮天使。

ドーナシーク：紺色のコートを羽織った男の墮天使。

カラワーナ：紅いスーツの女の墮天使。

ミツテルト：ゴスロリ衣装の女墮天使。

フリード・ゼルセン：口調がキチった人間。

ふむ、ミツテルトを捕虜にしよう。ちやうど警戒のために教会から出たところだし。

＋ミツテルト side＋

先日、レイナーレ様が危険視していた人間が悪魔として転生したって聞いてたっす。

グレモリー家の悪魔になったとドーナシークが言ってたっすから警戒のため周辺を見回るっすよお。

うちはそう考えながら近くの森まで飛んできたっす。

手近な木の枝に着地すると、木の影から大量の影？闇？が溢れてきたっす!?

飛ばうとしたら、翼が絡め取られてて身動き出来なくなっちゃったっすよお!!

足元の自分の影がうちを引きずり込んでいくっす…。  
うち、ここで死ぬんっすか…ね…。

＋ミツテルト side out＋

とっただー!!

って冗談は置いて、しばらく影の中に入れてけば。何もできない闇の中で精神的に弱るでしょうから。はぐれ悪魔退治にでも行きましようかね。

つと、暗霧に引つかかったようだ。

ふむ、廃工場にいるようだな。

既に日が暮れて、辺りは暗い。廃工場内は真っ暗な闇の中。

私は、廃工場内の闇を操り、実体化させた闇ではぐれ悪魔を切り裂いていく。

後始末に死体を影に入れる。

あ、もちろんミツテルトとは別の空間があるからそこにね。

この程度のはぐれ悪魔なら本当に片手間です倒せるからあつけない。

自宅に一応、アーシアの様子を見に帰る事にする。

黒歌は転生悪魔だから、会話に支障はないから仲良くしてるとは思うけど。

家に帰りつくと、玄関が開き黒歌が飛びついてきた。

「どうしたの？黒歌」

「ご主人ごめんなさいにやー！アーシアが攫われたにやー!!」

涙を溢れさせながら、縋り付いてくる黒歌を落ちるかせ。詳しいことを聞き出す。

私が出たあとに、買い物にアーシアを連れて出かけたそうさ。

その帰りに墮天使の女が現れ、連れ攫われたようだ。

しまった、黒歌に迂闊に力を使うなど言っただのがここで隙につながったか。

それに私も馬鹿だ。捕虜を捕まえて監視を切るなど。

私はすぐにリアスへ連絡を取り、アーシアが攫われたことと、墮天使使たちの情報を話す。

リアスの方からも情報が有り、墮天使たちは上からの指示で行動し



てるわけではなく、完全な独断だそう。これで心置きなく始末できる。

それに、一誠の依頼主がフリードによって殺されたのこと。

次から次に事を起こしやがって…。

天使を攫った罪、倍にして返してやろう。

＋レインナー side＋

アーシアが来ないことに疑問を覚え、認識障害を発動させながら空を飛ぶ。

下に公園が見え始めたあたりで、黒髪の女と一緒に歩くアーシアがいた。

善意で行動する子だ。一緒にいる女が困っていたから手伝っていたとかそんな感じだろうと適当に考えながら、風が吹き、アーシアのヴェールが飛ぶ。

黒髪の女が公園のベンチに座るよう促し、ヴェールを取りに行く。今だ。そう思い一気に下降しアーシアを連れ去る。

黒髪の女が叫んでいたがだいたい距離が開いた。追ってくるのは無理だろう。

困惑するアーシアを気絶させ、教会へと戻る。

教会へと戻ると、ドーナシックとカラワーナが騒いでいた。

見回りに行かせたミッテルトが帰ってこないそう。胸騒ぎがする。

フリードに教会内へ入ってきた者の排除を、ドーナシックとカラワーナは教会周りの警戒を、私は地下へ降り儀式の予定を早めることにする。

儀式の準備が出来た。あとは神器を抜き出すだけだ。

上の方からフリードの狂った声が聞こえる。侵入者がいたようだ。

フリードは人間だが、エクソシストとしての戦闘力は高い。

時間稼ぎは容易にできるだろうと考えていると轟音と振動が響き

渡る。そして強大な重圧がのしかかる。圧倒的な力の放出を感じる。空気がビリビリと震え。地鳴りが響く。

マズイ：確実にヤバイ何かが起こっている。

周りの神父に呼びかけ、儀式を発動させる。そして、苦しむアーンアの悲鳴とともに神器を抜き出した。

やった！やってやった！！これで私は！

笑いが止まらないついに手に入れたわ至高の力を！！

一瞬視界が暗くなり、すぐ明るくなった。

一体何が、

神父たちが原型が残らず肉片に変えられていた。

床も壁も天井も先ほどまで儀式場として機能していた場所が真っ赤に染められていた。

むせ返るような血の匂いが部屋を包んでいる。

そして教会から続く階段に”化物”がいた。

血が滴る金髪、薄暗い地下で蘭々と輝く紅い瞳。手に持つのは聖者の十字架を變形させた様な漆黒の大剣。

そして、溢れ出る先程からの空間と地鳴り原因の力の塊。

幼さを残す可愛らしい顔は憤怒に染まっている。



する。

待てマテまで、私は何をしようとしていたノ？

睨まれただけで冷や汗が流れ、涙がこぼれ出し、自分の命を差し出そうとした。

体が恐怖に蝕まれ、意識を保つのもやつとだ。目がチカチカしだし死ぬ 何も考え 殺される られなく 死にたくない ダメだ命を絶て 考えすら 嫌だ嫌だ嫌だ嫌だいやだいやいやいやああああああああああああああああああああああああ

「あ、ああああああああああアアああああ、ああああ  
!!!!!!」

喉が張り裂けそうなほど叫び、私は 彼女へ 攻撃をおおお当たれええええええ!!! 光の槍を 私は 投げた 当たれ だが 当たれ 彼女に 当たれ 通用しない 当たれ コトぐらい アタレ わかってた事じゃないか アタレエエエエ!!!!

光の槍は彼女が突き出した右手のひらににくい込んだ。

そして握りつぶサレタ

一気に彼女が近づいて大剣の腹の部分が私に迫る。

ゴシヤアツ!!

彼女の小柄な体では考えられないほどの圧倒的な衝撃が襲いかかり。

私は壁にめり込みながら停止した。

死んでない? なぜ私は死ンデナイノ?

攻撃が直撃した瞬間この恐怖から解放されると思ったのに思っていたはずなのに彼女は私を解放する気なんてサラサラなかった。

死なないギリギリの攻撃を私に仕掛けてきたのだ。

ああ、ギリギリだ。指一本動かせない。だが痛みで意識は保たれて  
いる。

激痛で涙が再度こぼれ落ちる。体の中もボロボロで口から血が溢れ出る。

抵抗できない瀕死の私の顔を持ち上げる彼女。

溢れ出た血の代わりに彼女の手から漏れ出した大量の闇が口から鼻から耳から体に注ぎ込まれる。

「ゴボオツゲリヤガガリヤツギヤゲリヤボジャゴボボガツツツ  
!!?!?!?!?!」

そして私は苦しみながら弾けた。

## 11話

教会に着いた。

周りを飛んでいた鴉が2羽いたが、心臓を抉り出してやった。死体なった2つを、引きずりながら入口へ向かう。

私は入口の扉を蹴り飛ばし中に入る。

教会の中には神父がいた。

はぐれエクソシストのフリード・セルゼンがいた。

「おやおやあゝ？侵入者ですかー？あつららゝ？、墮天使二人はやられちゃってるじゃないですかー。侵入者の足止めできないなんて役立たずのクズですね！おっと自己紹介が遅れましたあ。今からお前を殺すフリード様だ！。神への祈りを済ませて泣き叫びながら俺つちに首チョンパされてくださあああいい!!」

フリードは柄だけの剣を取り出し、光の刃を出現させる。

人間にしては速い動きで私に斬りかかるが、私は軽く躲しながら懐へ拳を入れる。

咄嗟に腕で防いだようだが、腕が折れ壁まで吹き飛ぶ。

「私はアーシアに用があるんだ。邪魔をするんじゃない」

フリードはフラフラしながら立ち上がり。

「イテエーなあ…あつあー、ダメだわ。俺っちプツンしちゃったわ。俺のスタンスがハチャメチャのグチャグチャになっちゃいましたよお。ダメだよねえゝダメダメだよねえゝ。俺の人生設計邪魔しちゃダメだよねえゝ!!だからさ！ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！つか、死ねよ！この糞ビッチのクズアマがよおおおおお

!!!」

口汚くフリードは叫ぶ。

そして再び、フリードは光の刃で攻撃してくる。余裕を持って避けると、懐から拳銃を取り出し、音もなく発砲してきた。

躲しているとフリードが話しかけてくる。

「それにしてもアンタ。魔女に堕ちた聖女様に用事みたいですけどおゝ！残念ながらもう死んでるんじゃないんですかね！今この地下で行われている儀式はなんと！なんとお!!アジアたんの神器を取り出す儀式でござえます!!ってことで目的を知ったお前は邪魔くせえんで、さっさと死んでくだちい!!」

「あ?」

コイツはなんて言った? 神器を取り出す? そんな情報は…いや、考えればアジアの神器は神器中でもレア中のレアなのだろう。

てつきりアジアの力を利用して、何かやる事でもあるのだと思っていたが…。取り出す? 神器は生まれた時にランダムに宿るものだ。生きてる間は一生付いてくるもの。それを取り出せば死ぬ。

…アジアが死ぬ?。

フザケルナ

私はリボンを取る。認識障害が解除され、魔力と妖力が溢れ出すのがフリードにも感じ取れたのか、狂気で染まっていた顔が、一気に顔面蒼白になる。

そして私は久しくぶりに力を全力で解放する。

空間が振動する。大地が揺れる。教会の壁が天井が私の力に耐え切れず吹き飛ぶ。

フリードは血を吐き出していた。エクソシストだろうが体が強化

された程度の人間であるフリードには目の前の存在から溢れ出る力には耐え切れなかった。

フリードは目を見開く、6メートル程離れていたルーミアが目の前に立っており、顔に蹴りが炸裂していた。

それに気づいたのは50メートル以上吹き飛び木に叩きつけられたあどだった。

「……ああ、いやあああああああああッツ!!!」

地下から響き渡る悲鳴に私は急いで地下に降りる。

考えたくもない最悪の事態が脳裏をよぎる。

降りたそこには数十人の神父と、高笑いするレイナーレ。

そして、十字架に貼り付けにされた。アーシア・アルジエント。

神器を取り出されたであろう彼女の顔は生気がほとんどなく真っ青になっていた。

彼女は降りてきた私に気づき、口元が動く。

(来てくれて。ありがとうございます)

死にかけなのは彼女なのに、来たことお礼を言い、私の身を案じてか心配そうに見ている。

嗚呼、神よ。

こんなに純粹で清い心を持つ彼女でさえ、アナタは助けにくれず、見放すのですね。

いつの時代でも、どの世界でもアナタはそうだ。

どれだけ信仰しようと、どれだけ善行を積もうと、アナタは私たちを助けてはくれなかった。

ああ、それが正しいのかもしれない。

でも、それでも！死んでいい理由にはならない!!



人間なんて脆くてすぐに死んでしまう！だけど、少しは手を差し伸べてやりなさいよ！

だから…だから…私…の…

ここで私の意識は闇に飲まれた。

次に見るのは、血だらけの儀式場と肉塊になったレイナーレだった物。

大量の返り血を浴びていた私は、アーシアを物質化した闇で持ち上げ、地上に出る。

私が彼女を持ち上げるには余りにも…汚れている。そうだ、私にそんな資格はないのだ。

地上に出るとリアスたちがいた。

アーシアはリアスへ預けた。

たしか、リアスは眷属悪魔を作れるはずだ。

アーシアは、彼女は生き返れるだろう。

預けると、私は家へと帰った。

私が彼女の側にいる理由などないのだから…。

それに私は彼女の記憶細工をした。

私が駆けつけた記憶を、リアス達が駆けつけた記憶に改竄したのだ。

闇の力で枷を付け、私に関する記憶を封じた。

これでいいのだ。

私と関わりすぎるのはよくない。

だから、それが彼女の幸せとなるなら、私は…。

ルーミアから連絡があった。

アーシアが攫われたと、彼女みたいな者でも、油断があるのだと初めて知った。

眷属を集め、ルーミアとアーシアの事について話す。

応援のために彼女がいる教会近くへと飛ぶ。

飛んだあとに、作戦を再確認し、いざ突撃しようとする。

重い重圧に空間が振動し、大地が揺れ教会が吹き飛んだ。

まだ、収まらぬ重圧の中で何とか動き朱乃に結界を張らせる。

彼女が怒っている。その重圧がコレなのだろう予測する。

悪魔の私達ならともかく、人間には耐え難い。

結界を張ったが、ギシギシと軋んでいる。

朱乃だけの力では持たないと判断した私は、現場はルーミアに任せ。

結界に集中することにする。

ルーミアの力の重圧の中で、10分ほど耐え切った私たちは息を切らしながらも重圧が消えた教会跡地へと行く。

教会から離れた私たちが余波でこれほど苦しめられたのだから中心へ行くのが恐ろしい。

悪魔になりたてのイツセーなんて余波に当てられたせいで冷や汗を流しながら震えている。

現場は教会の面影など既がない。瓦礫が散乱し、力の残滓が残っているのか息苦しい。

地下へ続く階段を見つけた。

そこから誰かが上がってくる。

全身をくまなく返り血で染めたルーミアだ。その後ろに盛り上がった闇がアーシアと思われる女性を優しく抱えていた。

ルーミアは…

「彼女は君に預けるよりアス。できれば眷属として生き返らせて欲しい。そして、彼女は私の事を覚えてないだろうから私のことを教えるな。しばらく私は部室へは訪れない。…彼女を頼む」

驚いた、彼女が、あのいつでも余裕を振り舞って、冷静で、優しく、先程まで圧倒的な力を振るっていた彼女が頭を下げて懇願してきたのだ。

今までに見たこと何彼女に私だけでもなく他の皆も驚いていた。そして、すぐに彼女はこの場を去った。

私は彼女がいなくなったあとにすぐにアジアへ悪魔の駒の僧侶の駒を使い眷属悪魔へと転生させた。

目覚めたアジアは私たちへお礼を言ってきた。

「イツセーさん？助けてくれたんですね！ありがとうございます！」

待て、何かがおかしい。立ち上がり、イツセーを見て、頬を染めながら笑っている。

私たちと面識がない彼女がなぜイツセーを知っている？

イツセーが彼女と面識があるのを隠してるのかと思えば、彼自身も困惑しているようだ。

まるで、私たちとルーミアの位置が変わったかのように。

そうか、理由は知らないがアジアの記憶を改竄したのだろう。

彼女ほどの力の持ち主ならありえる話だ。

だけど私は、思う。

何をしたか知らないけど、人間はそこまで甘くないのよ？

＋―アーシア side―＋

あれから数日経ちました。私はイツセーさんが助けてくれたことを思い出し頬が熱くなるのを感じます。

私の名前を泣き叫びながら、私を助けようとしてくれたイツセーさん

【シ\*ター\*旅行\*? / だ、大丈夫っすか?】

暗くなる意識にお礼を言い別れたはずだった。

【\*ー\*アと呼\*でく\* / 俺は兵藤一誠。イツセーでいいよ】

でも私は、リアスさんのおかげで転生悪魔として生き返ることができた。

【そ\*力は神\*\* / その力…】

人ではなくなってしまうけど、感謝しました。

【アーシアを返せよオオオオオオツ!! / 来て\*\*れ\*。\*りが\*うご\*\*\*ま\*】

これから友達と楽しい思い出が作れと思うと、とっても楽しみです。

…  
なにか記憶に違和感が…私はイツセーさんと出会いそして、そして

【一緒に買い物に行くにやアーシア！】

あれ？

【ご主人はとても優しいにや】

私は

【はい、ルーミアさんはとっても優しいです！】

どうして

ピキキッ

【シスターよ旅行か？】

【ルーミアと呼んでくれ】

【その力は神器か？】

パキンッ

【来てくれて。ありがとうございます！】

私の頭の中で枷が外れた音がした。

＋―アーシア side out―＋

あれから数日、私は学校にすら行っていない。  
私を心配する黒歌には申し訳ないが、すまない、まだ整理がつかん。  
昨日、白音が来た。  
アーシアが私のクラスに転入してきたそうだ。  
元気そうにやっているようだ。  
それ比べて私は、友人が一人。それも会って1日も経っていない友  
人の記憶から私と行動した記憶を封じただけで、こんな状態だ。  
友人一人でこの体たらく、私も案外弱いらしい。

ピンポーン

「はいにやーどちら様にやー？」

誰か来たようだ。白音がまた来てくれたのか？  
これ以上迷惑かけるわけにも行かないわね。  
いつもの私に戻りましょう。  
アーシアとは、クラスメートとしての友達として接しよう。  
クラスメートなのだ、おかしなことは何も無い…何も。

「ご主人様お客様だにや〜」

白音じゃないのか？一誠でも来たのか？  
私はベッドから立ち上がりリビングへ行く。  
そこには…

「お久しぶりです。ルーミアさん！」

「は？」

あれ？どうしてだ？えっ？まてまて、ナンダコレハ？

私は確かに…

「全部思い出しました。私のために来てくれて、ありがとうございます！  
しました！」

「ま、まて、アーシア。私：は、確かに、記憶、を」

「はい！だから全部思い出しましたよ！ひどいですよ。ルーミアさん！私といた記憶を勝手に封じるなんて…。黒歌さんとの記憶がなかったら私ずっとルーミアさんのこと忘れてましたよ！」

頬を膨らませ。私怒ってます！つと表現する彼女は可愛らしいが…。

黒歌…？あ…。

フフフ、全く私は詰めが甘い。

こんな、こんな単純なミスを犯すなんて。

たく…、本当に愉快だ。

全く私から離すために枷を付けたのに、ミスってどうする。

でも、彼女が望むなら。

「すまないなアーシア。また私と友達になつてくれるか？」

「何言ってるんですか！」

そら、怒るわよね。

「私たちは、もう友達じゃないですか！！」

フフ、ホント彼女は天使のように可愛い。

「ええ、そうだったわね」



仕方がない、神から見放された彼女は私が守ってあげましょう…今度は絶対に。

この後、ミツテルトの存在を思い出して、慌てるというなんとも締まらないことになっていた。

## 12話

「いくら何でも、これはひどいと思うんすよ」

「すまない。完全に忘れてたわ。」

今私は、先日放置してたのに気づいたミツテルトと話している。影から出した当時は、だいぶ衰弱しており、精神的にもヤバそうだった。

「いや、うちも捕まった瞬間色々覚悟してたんすよ。それなのに暗闇の中に閉じ込めて数日間忘れてるってあんまりだと思っすよおー！！」

「安心しろ飼い主は殺してしまっただけ、ちゃんと家で飼うから」

「うちは犬猫じゃないっすよ!!」

「ああ、鴉だったわね」

鳥小屋必要？つと聞くと私ぐらいの大きさだと牢っすよ!?!と元気よく答える。

「鳥小屋も閉じ込めとく牢でしょ？大丈夫よちゃんと鉄製にしてオープンで手錠も付けるわ」

「そんな高待遇いらなっすよおおおお!!!」

「なによ、不満？」

「むしろどこに満足いく要素が!？」

「仕方ないわね…」

「やっど、わかってくれたっすか…」

「水飲み場を付けるわ」

「そういうこつちやないっすよ!？誰がさっきの要素に付け足せって言ったっすか!」

「ギャグボールとアイマスクと鞭もあるといいわね…」

「お願いですからこれ以上マイナスオプション増やさないでくださいっす!!さっきの水飲み場が水責めする場所に思えてくるじゃないっすか!」

「あなたそんな趣味が…」

「引かれた!？なぜうちが引かれるんっすか!」

「さて、冗談はこれくらいにしときましようか」

「冗談だったんっすか!？やる気に満ち溢れたような気がするんっすけどー!」

「冗談2の本気が8よ」

「ほぼ本気じゃないっすか!？」

うがー!と立ち上がるミッテルト。彼女を弄るはけっこ楽しい。

そうそう、彼女は今日から私の家で暮らすことになった。一人の人間を私欲のために殺そうとした堕天使側の子だったが独断で動いたせいで堕天使側から見放され、私の家で監視も兼ねて保護することにした。

彼女を弄るのはストレス発散になって中々にいい。

そして実は、もう一人私の家に入居者ができた。

アーシア・アルジェント。堕天使が狙っていた子なのだが、教会から見放され、堕天使側からは殺されて、転生悪魔となったハードな人生を持つ彼女だが、私が勝手に記憶を改竄したことに大変ご立腹で、許してもらおう理由として私の家に入居することとなった。もちろん改竄した記憶は元に戻してある。

「さて、弄r…話すのも終わりにして今日は寝ましようか？」

「弄るって言ったすね！弄るって！」

「うるさいと（意識を）落とすわよ？」

「理不尽っす…」

次の日の朝、少し早めに目が覚めた。

たまには良いかと少し散歩することにする。

＋―イツセー side―＋

俺は一か月ほど前、ひよんなことから人間から悪魔に生まれ変わった。

リアス・グレモリー様の眷属悪魔にである。

悪魔というのは人間に呼び出され、代価をもらう代わりに相手の願いを叶える。

もちろん叶えられる願いだけであるが、そんな非日常的な仕事を生業としていた。

俺は部長の下僕悪魔として、日々下働きをしつつ、目標に向かって一歩一歩前へ進もうとしていた。

俺の目標？そんなの決まってる！

「ハーレム、王に、俺はな、る……ぜーはー……」

それに…

「少しでも…月闇並みの、強さに、近づく!!」

「そうよ、そのためにもまずは日々の基礎鍛錬から。少しづつでも強くないといけないわ」

いまだ見習い悪魔だが、基礎を固め修行して少しでも強くなり、活躍しまくって出世すれば爵位を頂けるまでいけるらしい。そうなる、部長みたいに自分だけの下僕が持てる。

そうさ！女の子をたくさん眷属下僕悪魔にして、夢の世界を実現させるんだ。

そのためには部長も言うように強くないといけない。

あの時見た月闇の圧倒的な力。離れていても感じる重圧。それに近づき、強くなればそれだけ上を目指せる。

「私の下僕が弱いなんてことは許されないわ」

と、朝練に関して妥協しない。強くなるためだ、努力なんていくらでもしてやる。

思い出するのは悲しい顔をしてアーシアのことを頼むと言っていた。月闇の顔。

もしかしたら、俺が強ければ月闇と協力して助けに行けたのかもしれない。

女の子のあんな顔を見るなんゴメンだ。

彼女が笑って俺に背中を預けてくれ程には強くなってみせる！

「はあはあ……」

ゴールの公園に到着すると、全身から汗が吹き出る。まだまだ体力がないと痛感させられる。

「お疲れさま。さて、次はダッシュ行くわよ」

「はいー！」

今は、ダッシュが終わり筋トレメニューの腕立て伏せに臨んでいる。

「あなたの能力は基礎が高ければ高いほど意味があるのよ」

「ういっす……六十五……六十六」

月闇の力に当てられたあの日、立てなくなる程に消耗した俺は、自分が情けなくて、もっと強い力を望んだ。

その俺の想いに神器は答えてくれた。

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

神器の中でも、神すら滅ぼすことが可能な力を持つと言われる特殊な神器で現時点で13種の神滅具（ロンギヌス）の一つ。それが赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）だ。

これで、彼女に1歩でも近づけていけば最高だ。

効果は10秒ごとに自身の能力を倍加する。上手く使えば上級悪魔ですら倒せるとのこと。

倍加するにはそれなの体力が必要となる。今はそこまで体力はないので倍加は数度しか行えない。無理に倍加すれば体が壊れるそう  
だ。

それにしても、腕立てをしている訳だがその、部長のお尻があたつて…。

べしっ！

「あうっ！」

部長にお尻を叩かれた…つい声が出てしまったがMではないぞ。

「邪念が入っているわ。腰の動きがやらしい」

「…そ、そんな…七十一…。部長が俺の上に乗っているかと思うと…七十一…お馬さん根性がマックスになりますよ…七十二！」

「腕立て伏せをしながらおしゃべり出来るなんて、成長したわね、イツセー。もう百回追加しましょうか？」

部長は苦笑しながら無茶を言う。いや、あの部長…いくら鍛えた  
いって言ってもそれは死にますって…。

「ん？誰か来たわね」

「へ？誰ですかね？」

そんな疑問を口に出していたら。

「おや？貴様らこんな朝からSMプレイとは精が出るな」

そこには月闇が立っていて、見当違いな事を言ってくる。思わず崩れた。

「お茶でも飲むか？先程買ったのだが。それとも熱湯が良かったか？」

「Mプレイなんてやってないから！体力作りやってるだけだから！」

「だよな。プレイに耐えられるように初級からか。DMは本当にタフだからな何度攻撃しても気持ち悪い笑顔を浮かべながら迫って来るのはかなり恐ろしい。だから、退くなら今だぞ？」

あの天人はしつこかった。攻撃しても笑いながもつともつと迫って来るから。あの時は全力で逃げたのよね。本当に恐ろしかった、DMの底力を垣間見たわ。

「俺って既にそんな認識で固定されてんの!？」

「違うのか？」

「イツセー。今度朱乃に頼みましょうか？」

「違うから！部長も乗らないで！」



散々弄られ、暫くしたら再開し、トレーニングを続けた。  
ルーミアは近くのベンチで、闇色の球体でお手玉してた。  
ミスって落とした球体がボゴオン！と弾けて穴を開けてたのは見  
なかつたことにした。

時間が来たので学校へ行くとアーシアと月闇が話してた。

一緒に混ざり話していると悪友二人が妬ましく睨んでいた。

どうやったらそんなに仲良くなれるのかとか、女の子を紹介しろ  
！って言われたので許可が出た『ミルたん』の番号とメールアドレスを教え  
ておいた。

どんな子だと聞いてきたので『乙女』と答えておく。

月闇がホントはどんな奴なのだ？と聞いてきたのでホントのことを  
話したら興味を持っていた。

魔法を覚えさせたら楽しいことになりそうだとか言ってたので慌  
てて止めた。

やめてくれ絶対大変なことになるから…本当に頼む…。

「フリか？」

「違うからな！」

## 13話

私は放課後、部室に行く。

アーシアが嬉しそうに私に話しかけていた。

どうやら、今日から契約デビューらしい。

大丈夫だろうかと少し心配していると。

そのフォローに一誠が付くという。

「ふむ、一誠。アーシアを頼むぞ」

「おう！任せとけ！」

「行ってきますね！ルーミアさん！」

頼もしく頷く一誠と、元気に行くアーシア。

あの様子じゃ、大丈夫そうだな。

そう思っていると、スマフォが震え連絡が来たと合図する。

リアスに断り電話に出る。

『やあ、今回も仕事を持ってきたよ』

「そうか、ならっさつと話そうかサーゼクス。無駄に挨拶しているだけ無駄だ。挨拶するより先に依頼内容を言え」

『毎度思うけど私に対してのその扱いは、どうにかならないのかい…？』

テンションが落ちた魔王が何かほざいているが切ってやろうか。

「ん？依頼はないのか切るぞ？」

『待って！話すから！無駄なこと言わないから！』

慌てて、止める魔王。そうだ無駄なこと言っていないで最初からそうすればいい。

『はあ…今回の依頼はSSレートはぐれ悪魔の【炎夜】だ。目撃情報は送るから確認して、討伐をして欲しい』

「ふむ、分かった。さつさと話した礼にリアスの写メでも送ってやろう」

『な!?本当かい!今日ほど君を天使だと思った日はないよ!!』

「嘘だ」

『ゴオファツ!!』ブツツ

リアスが何か言いたそうに睨んでいるが知らん。

さつさと、依頼を済ませるか。

ちなみに余談だが、私の依頼は名前の通り炎と夜（暗闇）を操る悪魔だったのだが。

私との相性は最悪で暗闇を操ろうと影に入った瞬間に、私とその影を操り瞬殺だった。

SSレートの悪魔で最短のタイムを叩き出したのだった。

＋－イツセイー side －＋

今日はアーシアの初依頼だった。

心配そうにしていた月闇に頼むと言われたので気合を入れてアーシアのフォローをするぜ！

そう、思ってたのだが俺別にいらなくね？つてぐらいにサクサクと進みアーシアの初依頼何事もなく無事達成された。

部屋に戻った俺たちは部長に報告を済まし、今日の悪魔稼業を終え、帰宅した。何やら思い詰めた表情の部長がとても気になったが…。うーん、何を悩んでいるのかな？

さて、思いを馳せるのもいいが、風呂に入って寝る準備をしないと、立ち上がり、風呂に行こうとする。

カッ！

そのとき、俺の部屋の床に光が走る。光は円状に展開し、見覚えのある図柄を描き出す。

…これ、俺らの眷属の文様じゃね!?

グレモリー眷属の魔法陣。誰だ？てか、なんで俺の部屋に？俺の部屋に誰かがジャンプしてくるんですが!?

いつそう眩い光が部屋を包み込み、魔法陣から人影が。赤髪の女性が現れた。

「部長…?」

現れたのは、思いつめた表情のリアス部長だ。

部長は俺を見るなり近づいてきて、開口一番に衝撃的な事を言う。

「イツセー、私を抱きなさい」

…：はい？しまったあまりにの事に一瞬思考が飛んだようだ。え、部長今なんて…。俺の耳がおかしくなったのか？

怪訝そうな表情の俺に部長は。

「私の処女をもらって頂戴。至急頼むわ」

…。

……。

……………。

…ふぁっ!?

部長の刺激的な日本語に衝撃を再度受けた。

「ほら、ベッドへお行きなさい。私も支度をするから」

え、いや、ちよ、ちよつと！何これ!?何これ!?俺の思考が部長の言葉に追いつけずオーバーヒートしそうになる。

バツ！

スカートを脱ぎ捨てる部長。ぐはっ！純白のパンツ！脚線美！撫で回したくなる太もも！凄まじい光景に視線を奪われていると、ついに上着にまで手をかけていた！

「ぶ、部長ぐ、これ以上は！」

狼狽する俺。当然だよな！突然現れた部長に「エッチしましょう」なんてエロい俺でも戸惑うって！

バサッ

ついに上着まで脱いじやったよ！下着姿の部長に目が釘付けになる。

「イツセー、私ではダメかしら？」

「い、いえー！そんなことは！」

「色々考えたのだけど既成事実を作るしか方法がないの。これなら文句もないはず」

一体何があつて、何を考えたあとに、なぜこうなつたかの説明が欲しいですよ部長！

「身近でそれが出来そうなのはあなたしかいなかったわ」

だからなぜ!?部長の初体験に、どうして俺が!?  
光栄と言いたいけど、そんな余裕今の俺にはないですよ！

「…最初は祐斗をと思ったけど、祐斗ではダメ。彼は根っからのナイト。絶対に拒否するわ。だからこそ、イツセーしかいなかった」

木場に勝つた!?ウハハハ！なんか知らんが、そこは素直に喜べるぞ！俺はお前に勝つたぞ、イケメンめ！

「…まだ足りない部分もあるけれど、素質はありそうなものね」

「頼んでから数分で情事まで行ってくれるのあなたぐらいなもの」

え、それは喜んでいいのか?そう考えているとベッドに押し倒され、部長が俺に馬乗りになる。

パチン

ブラのホックが外される音。解放され、プルンと揺れ現れる部長の生おっぱい！

「イツセーは初めてよね?それとも経験が?」

「は、初めてです!」

「そう。私も初めてだから、お互い至らない点もあるでしょうけど、何とかして最後までことをしましょう。大丈夫、仕組みは簡単だわ。私のここにあなたの収めるだけよ」

ぶ、部長刺激過ぎて、脳みそが弾けそうだよ！  
部長に右手を取られ。

むにつ  
ブハッ！

自分の鼻から血が吹き出るのがわかった。  
むにつて！むにつて！ゆ、夢にまで見たおっぱいの感触！

「わかる？私も緊張してるわ。胸の鼓動が伝わるでしょう？」

そう言いながら部長は俺の服を脱がしにかかる。  
うわああああ！俺、女の子に脱がされてるよおおおお！

「で、でひゅが！お、おお、俺、自信がちよつとないひょうななn」

緊張しすぎだああああ!!噛みまくって変な声に！しようがない  
じゃん！俺、童貞なんスからあああああつ！

そんな俺に一言。

「私に恥をかかせるの？」

ボンッ！

理性が飛んだ音がした。

ガバッ！と部長の肩を掴み、逆に押し倒した。  
ゴクリと生唾を飲み込み、深呼吸をして…いぎ！

カッ

部屋の床が再び光り輝きだした。あれ？なんかデジヤビュー？

「…」足遅かったわけね…」

忌々しく床の魔法陣を見つめる部長。魔法陣の文様は…グレモリー眷属？

「誰だ？木場？朱乃さん？小猫ちゃん？アーシア？まさかフェイントで月闇!？」

「私ならさつきからいるわよ?！」

「あ、なら候補が一つ減ってって、なんでいるんだよ!？」

「面白そうな気配がしたからビデオカメラ持って遊びに来た」

「準備万端!？」

「バッチリ撮っておいたZE!！」

「グハッ!！」

とやっている間に、銀色の髪をした美女メイドが出てきた。えつメイドさん？

「うわっ咲夜みたいなやつが」

誰さ咲夜って、月闇の眩きに疑問を漏らすのが答えるものは誰もいない。



「こんなことをして破談へ持ち込もうというわけですか？」

メイドさんは呆れた口調で淡々という。それに部長は。

「こんな事でもしないと、お父様もお兄様も私の意見を聞いてはくれないでしょう」

「こんなことか言ってるメイドもサーゼクスの匂いがべつとr」

メイドさんが月闇の口を手で押さえつける。「静かにしといてください」つとといったメイドさんの頬は赤いような…。

「でも下腹部にまだ匂いg」静かにお願いできますか？」「えー」

「私の貞操は私のものよ!!」

部長が話の軌道を無理やり戻した!?

「このような下賤な輩に操を捧げると知れば旦那様とサーゼクス様が悲しまれますよ」

「来る前に一発やってr」お願いですから本当にそれ以上は…「えー」

「私が認めた者に捧げて何が悪いのかしらそれに私の可愛い下僕を下賤呼ばわりしないでちょうだいたとえあなたでも起こるわよグレイファイア」

部長…嬉しいのですが、そのセリフをノンブレスで言うとなんか、こう…。

いや、月闇の邪魔が入らないように無駄に変なところで必死になっていますよね!?

「何はともあれあなたはグレモリー家の次期当主なのですから無闇に殿方へ肌を晒すのはお止めくださいただでさえ事の前なのですから」

「貴女は事が終わってスッキリしてるわね」

「もう…何なんですかこの方わ…」

ノンブレスで言い切ったのに揚げ足を取られ、床に座り込むグレイフィアさん。部長も頭を押さえている。なんとか立ち上がるグレイフィアさん。俺の方を見て。

「はじめまして。私は、グレモリー家に仕えるものです。「サーゼクス」と一発やってた」グレイスフィアとおおおお!!!」

セリフにかぶせられて叫ぶ。

やめてやれよ月闇！やりたい放題か！。

「お見知り、おきを…」

最初の状態からだいたい衰弱したグレイフィアさん。哀れ…。

「ゴメンなさいイツセーさつきまでの事はなかった事にして頂戴私も少し冷静ではなかったわ今日のことはお互いに忘れましょう」

あーはい、ノンブレスで必死ですな部長…。

「イツセーまさか、この方わ？」

「私は月闇ルーミア」

「存じています」

「ベッドの上で聞いた？」

「もう、嫌…この人…」

哀れ…。

「兵藤一誠私の『兵士』よ『赤龍帝の籠手』の使い手」「『赤龍帝の籠手』龍の帝王に憑かれた者」「グレイフィア私の根城にへ行きましよう話はそこで聞くわだから早くすぐに行きましよう」「ええ、急いでいきましようさぁ行きましよう」

間を挟むことなく話しきったよこの二人、そして俺置いて行っちゃったよ。

月閨、お前は満足そうに笑ってんじやねーよ!!

ってよく見たらビデオカメラセッティング済み!? さっきのも撮ってるとか性格悪いなお前!!

グレイフィアさん最後涙目だったぞ!

ってスマフォ取り出して何を…。

「あつ、サーゼクス？」

『珍しいね君から掛けてくるなんて』

「グレイフィアの涙目で真っ赤になってる顔の写真いくらd『言い値で買おう』さすが話がわかる」

好き勝手やりすぎだろコイツ…。

しばらくして、再度部長が飛んできて。

頬に触れる唇。

……………うわ。うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!

ほっぺにキスされたあああああああ!!!

「今夜はこれで許して頂戴。迷惑をかけたわね。明日、また部室で会いましょう。」

部長はそう告げて魔法陣で帰っていった。

## 14話

学校へ行くと、一誠が目の下に濃い隈を出し。ゲツソリとしていた。

昨日あれから寝れなかったのか？私ぐっすり快眠だったというのに。

：匂いが強いぞ一誠。あれから一人で自家発電してたのか貴様は。

「大丈夫ですか？イツセイさん？」

アーシア心配しなくても大丈夫だ。自家発電やりすぎてゲツソリしてるだけだぞそいつは。近づきすぎると孕むぞ。

そのあと変態二人が一誠の名前を叫びながら登場。

内容から察するに昨日の「ミルたん」とやらが何やらすごかったらしい。

たしか、心は乙女、体は漢だったかしら。

本当は面白そうだから、魔法覚えさせたいんだけど。一誠の顔がマジだったので今回は退いてやろう。

『ダーククリーチャー』って私のことじゃないわよね？

あ、ダブルブレーションバスターで一誠が吹き飛んだ。

放課後、部室へ行く前に出すものがあつたから職員室へ寄ってから行く事にする。

アーシアは先に向かわせたりアスの眷属だから、この程度のことには付き合わせるわけにも行かない。

部室の前に来ると結界が張ってあつた。

破ろうとするが意外と硬い。面倒なので大剣を出し扉に突き刺す。結界が破れ、ついでに扉も外れた。

中にいたメンツが驚いていたが適当に扉を取り付け、私が結界を張りなおす。

「おや？グレイファイアじゃないか、私を見ただけでだいぶ疲れた顔をしているが大丈夫か？」

「あなた様は…いえ、もう何も言いません…」

「そう、アーシア少し髪梳いてー」

「あ、はい」

私はソファアに座り、アーシアに髪を梳いてもらう。

「はあ…みんな揃ったから、部活が始まる前に話があるの」

「お嬢様、私がお話しましょうか？」

リアスは、グレイファイアの申し出を断る。

「実はね…」

リアスが口を開いた瞬間。部室の床に描かれた魔法陣が輝き出し、光力を失い光が消えた。

「あ、やべ」

結界を一旦解除して、再度貼り直す。

結界が強すぎて、ジャンプができなかったようだ。

再度、魔法陣が輝き出す。

魔法陣は形を変え、グレモリーの文様から変化していく。

「…フェニックス」

木場がそう呟いた。

その名を聞いて、どこぞの不死人が思い出させるが、関係ないだろう。

室内を眩い光が覆い、魔法陣から人影が姿を現す。

ボワツ！

魔法陣から炎が巻き起こる。

「暑い…」

私はそう呟き、

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ―破道のきゅつもがもが」

「それはダメだろ!?!てか使えるのかよ!」

一誠に口を抑えられた。

やめろ、お前の手はまだ臭いが酷い離せ馬鹿。

一誠に蹴り飛ばす。

そして炎が晴れ、男が現れる。

「ふう、二度目は成功か。人間界は久しぶりだ」

赤スーツを着崩し、シャツを胸まワイルドに開ける。

見た目は二十代前半程のガキだろう。  
そいつはリアスに声をかける。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

：なんだろう、リアスはそいつを睨んでいるし、明らかに歓迎した雰囲気ではない。なんだこの場違い野郎。

男はそんなのは気にせず、リアスに近づく。

「さて、リアス。早速だが、式の会場を見に行こう。日取りも決まっているんだ。早め早めがいい」

リアスが思っているより、苛立たないがウザイなこの悪魔。

「千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手 光を落とす道  
火種を煽る風 集いて惑うな 我が指を見よ 光弾・八身・九条・天  
経・疾宝・大輪・灰色の砲塔 弓引く彼方 皎皎として消ゆ ―破道  
の九十一―」【千手皎天汰hもがが】

「ダメだって！どこで覚えてくんのもそれ!?それは洒落にならないから！」

む、また邪魔しおって、とりあえず蹴り飛ばしておく。

男がリアスの腕を掴む。

「…放してちょうだい、ライザー」

低く迫力のある声で男の手を振り払うリアス。

迫力はもうちよいあった方がいいと思うぞ、相手が立てなくなるくらい重圧をかけて言えば、高評価だ。

ライザーと呼ばれた男は気にすることもなく苦笑するだけだ。



最近は、近くにキラキライケメンの祐斗がいたせいか、どうもこのような男には癪に障る。

「I am the bone of my…」

「色々突っ込みどころがあるが、ちよつと待ってくれ月闇」

「む…」

「どうやら一誠も癪に障っていたらしい。

仕方ない。今回は言わせてやるさ。」

「おい、あんた。部長対して無礼だぞ。つーか、女の子にその態度はどうよ?。」

一誠のドヤ顔ウザいな。

男、ライザーはそんな一誠を見る。

「あ? 誰、おまえ?。」

不機嫌そうだな。リアスと態度違いすぎて面白い。

明らかに見下した目で、嫌悪感が伝わって来る。なんだ、キモい。

「俺はリアス・グレモリー様の眷属悪魔! 『兵士』の兵藤一誠だ!。」

だから、ドヤ顔ウザイ。

「ふーん。あつそ」

くふっ。いけない笑いそうになったわ。

ドヤ顔の一誠にその反応。

いいわね、そういうのは嫌いじゃないわ。

ライザーの反応にズッコケた一誠は。

「つーか、あんた誰だよ」

一誠の問い掛けに男は驚いた顔をする。

「…あら？リアス、俺のこと、下僕に話してないのか？つーか、俺を知らない奴がいるのか？転生者？それにしたってよ」

すまん、私も知らん。

「話す必要がないから話していかないだけよ」

「あらら、相変わらず手厳しいねえ。ハハハ…」

男は目を引きつらせながら苦笑する。そこへグレイファイアが介入する。

「兵藤一誠様」

「は、はい」

「この方はライザー・フェニックス様。純血の上級悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家のご三男であらせられます」

フェニックスねえ…。そういや、妹紅の焼き鳥屋は中々に美味だったわね。

「そして、グレモリー家次期当主の婿殿でもあらせられます」

うわ…。そんな奴が婿とか。私ならお断りだな。



!？」

ガキ発言に思わず。影から出した教会に飾られている巨大な十字架を取り出し投げつけた。

おっと、思わずやってしまった。

ちなみにこの十字架はアーシアを貼り付けていたものだ。

あのあと、ちゃっかりパクっておいた。

十字架を受けたライザーはもちろん。十字架を見た悪魔全員が苦しんでいたが、リアスたちは隠れてサムズアップしてる。

倒れたライザーに構わずリアスは説明する。

「彼女は月闇ルーミア。私たちの協力者よ。今のように変に発言すると、悪魔の弱点を的確に攻撃してくるわよ」

顔を抑えながらライザーは立ち上がり。

何事もなかったようにソファアに座り、リアスの髪を触り始める。

さっきの事はなかったことにしたようだ。賢明な判断とも言える。

だが、我慢の限界だったのかりアスが。

「いい加減にしてちょうだい！」

激昂したりアスの声が部屋に響き渡る。

ソファアから立ち上がりライザーを睨みつけているが、変わらずニヤけた顔をしている。

「ライザー！以前にも言ったはずよ！私はあなたと結婚なんてしないわ！」

「ああ、以前にも聞いたよ。だが、リアス、そういうわけにはいかないだろう？キミのこのお家事情は「アーシア膝枕して」「はい！」…いい、意外にも切羽詰っていると思うんだが？」

「余計なお世話だわ！私が次期当主である以上、婿の相手ぐらい自分で決めるつもりよ！父も兄も一族の者も皆急ぎすぎてるわ！当初の話では、私が人間の大学を出るまでは自由にさせてくれるはずだった！」

「その通りだ。キミは基本的に自由だよ。大学に行っていていいし、下僕も好きにしたらいい。だが、君のお父様もサーゼクス様も心配なんだよ。御家断絶が怖いのだ。ただでさえ、先の戦闘で純血悪魔が大勢ななくなった。戦s「このお茶菓子うまいな。アーシア」「はい、甘くて美味しいです」…戦争を脱したとはいえ、墮天使、神陣営とも拮抗状態。奴らとのくだらない小競り合いで純血悪魔の跡取りが殺されて御家断絶したなんて話もないわけじゃない。じゅん「あ？何？サーゼクス？依頼？不死鳥様のお話長くて眠いからパス、バイバイ」純血ってお前さつきからうるs「ぎゃしゃ!？」

十字架を投げる。

そして、

「なげーんだよ。くどいんだよ。何文字書かせるんだよ。次のページでもページの半分お前のセリフで埋まってんだよ。最後の一文で十分だろ。ペラペラといつまで語ってんだ。あんま長いと捻って書くこうにも書きにくいんだよこの野郎！だからと言って『ライザーはリアスに語った』とかじゃ、味気ないから書いてるんだ！そこまで語りたいたら2ページ程度じゃなくてじゃなくて上条さん並に4ページ近くセリフ喋って見やがれ！したら諦めつくんだよ！簡単にまとめちゃうんだよ！そう、中途半端だと書こつかな？って思っちゃまったじゃないか！」

「意味わからないけど、アナタのセリフもさつきのライザー以上に喋ってるからね」

「おっと」

思わず言ってしまった。

さっきのセリフは忘れてくれ。

ちよっと、本音が漏れたただけだ。

「ぐふっ、えっと、こ、この縁談には悪魔の未来がかかっているんだ」

「それでいいのライザー…」

リアスは咳払いをし。

「私は家を潰さないわ。婿養子だつて迎え入れるつもりよ」

部長の言葉を聞いたライザーは、満面の笑みを浮かべる。

鼻血垂れてんぞ。

私のせい？聞こえんな。

「おお、さすがリアス！早速俺と…」

「でも、あなたとは結婚しないわ、ライザー。私は私がいいと思ったものと結婚する。古い家柄の悪魔にだつて、それぐらいの権利はあるわ」

そのセリフにライザーは機嫌が悪くなる。

「俺もな、リアス。フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。この名前に泥、ここ来たくなかった 人間界の 建物 好きじゃない し 人間界好きじゃない ちよっと 耐え難い」

セリフが長くなると感じて十字架を装備した。すると途端に短くなった。

「僕は君の下僕を全部燃やし尽くしてでm「アジアはダメよ」「アジア様とルーミア様以外燃やし尽くしてでもキミを冥界に連れ帰るぞ」

ライザーの全身から放つ重圧が皆を襲う。

だが、ルーミアの重圧を受けた者しかいない。意外と平気そうだ。ただ一人アジアが怯えている。

アジアは震えながら私に抱きついてきた。

あ、約得。

リアスは赤いオーラが。

ライザーは全身から炎を出し、纏い始め。

「暑い」

「はいっす…」

上がってた温度が下がる。

「お嬢様、ライザー様、落ち着いてください。これ以上やるのでしたら、私も黙って見ているわけにも行かなくなります。私はサーゼクスの名誉のためにも遠慮などしないつもりです。「夜のお勤めm」すみませんが、黙りやがってください、ルーミア様」

リアスもライザーは顔を強ばらせる。

この二人には畏怖の対象なのか。

「最強の『夜の女王』…く、『夜の女王』………貴女にそんなことを言われたら、俺も流石に怖いよ。バケモノ揃いと評判の「リアスさんの」サーゼクス様のため、お願いですから被せないでください…」

みんなが（アーシア以外）冷めた目で見ているが何の事やら。

「ゴホンっ…こうなるとは、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も重々承知でした。正直申し上げますと、これが最後の話し合いの場だったのです。これで決着がつかない場合のことを皆様方は予測し、最終手段を取り入れることとしました」

「最終手段？…どういうこと、グレイファイア」

「お嬢様、ご自分の意見を押し通すのでしたら、ライザー様と『レーティングゲーム』にて決着をつけるのはいかがでしょうか？」

「——ッ!？」

グレイファイアの意見にリアスは驚いているな。

『レーティングゲーム』知識にあったな確か。

「爵位持ちの悪魔たちが行く、下僕同士を戦わせて競い合うゲームのことだよ」

祐斗が一誠に説明してるのが聞こえた。

ああ、思い出した。

「お嬢様もご存知の通り、公式の『レーティングゲーム』は成熟した悪魔しか参加できません。しかし、非公式の純潔悪魔同士のゲームならば、半人前のあくまでも参加できます。この場合、多くが…」

「身内同士、いがみ合いよね」

リアスが嘆息しながら続ける。



「つまり、お父様方は私が拒否した時のことを考えて、最終的にゲームで今回の婚約を決めようってハラなのね?……どこまで私の生き方をいじれば気が済むのかしら……っ!」

イラついてるなりアス。

「では、お嬢様はゲームを拒否すると?」

「いえ、まさか、こんな好機はないわ。いいわよ。ゲームで決着をつけましょう、ライザー」

「へー、受けちゃうのか。俺は構わない。ただ、俺はすでに成熟しているし、公式のゲームも何度かやっている。今のところ勝ち星の方が多い。それでもやるのかリアス?」

挑発的なライザーの言葉に、リアスは笑みを浮かべ。

「やるわ。ライザーあなたを消し飛ばしてあげる」

「いいだろう。そちらが勝てば好きにすればいい。俺が勝てばリアスは俺と即結婚してもらう」

睨み合う両者。

「承知しました。お二人のご意見は私グレイフィアが確認させていたいただきました。両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね?」

「ええ」

「ああ」

二人共了承する。

「わかりました。ご両家のみなさんには私からお伝えします」

確認が終わるとライザーはリアスの眷属に目を向けて嘲笑を浮かべる。

「なあ、リアス。まさか、ここにいる面子がキミの下僕なのか？」

「だとしたらどうなの？」

「これじゃ、話にならないんじゃないか？キミの『女王』である『雷の巫女』ぐらいしか俺の可愛い下僕に対抗できそうにないな」

ライザーは笑いながら指をパチンと鳴らすと、部屋の魔法陣が光り出し、人影が出てくる。

ライザーの周囲に十五名の眷属悪魔が並んでいる。

「と、まあ、これが俺の可愛い下僕たちだ」

いろんな奴らいるけど全員女性って、ライザーの性格丸出しね。

って、なんか一誠が震えてる…。あーうん、あいつのことだ、美少女がいつぱいだとかハーレムだとかでほざいてるんでしょうね。

通常運転のこいつってある意味大物だわ。

あ、泣きながら感動してる。流星に引くわ…。

「お、おい、リアス…。この下僕くん、俺を見て大号泣しているんだが」

ライザーもさすがにドン引きだよ。

リアスも困り顔だ。

「その子の夢がハーレムなの。きつと、ライザーの下僕悪魔たちを見て感動したんだと思うわ」

一誠よ、貴様はもう少し頭の中なんとかならんのか？

「きもーい」

「ライザーさまー、このヒト、気持ち悪ーい」

キモがられてるぞ一誠もう少し抑えろ。  
ライザーは女の体を撫でながら慰める。

「そう言うな、俺の可愛いお前たち。上流階級の者を羨望の眼差しで見てるのは下賤な輩が常さ。あいつらに俺とお前の熱々なところを見せつけてやろう」

私はそつとアーシアと小猫の目を闇で塞いだ。

この子達の前でディープキスなんてするな。目の毒だ。音を立てるな。

リアスも呆れて見てるぞ。

「んっ…あふっ…」

「え？何が起こってるんですか？何も見えませんよ!？」

「月闇お姉さま、見えない」

「しばらくそれでいなさい。まだ知らなくていい」

ライザーは嘲笑しながら言う。

「おまえじゃ、こんなこと一生できまい。下級悪魔くん」

「俺が思ってること、そのまま言うな！ちくしょう！ブーステッド・ギア！」

落ち着け一誠。お前はもう少し平常心つてものをだな。

私の考えは届かず、一誠はライザーに物申す。

「お前みたいな女だったらしと部長は不釣り合いだ！」

「は？お前、その女だったらしの俺に憧れてんだろ？」

一誠まさかのブーメラン。

「う、うるせえ！それと部長のことは別だ！そんな調子じゃ、部長と結婚したあとも他の女の子とイチヤイチャするんだろ？」

「英雄、色を好む。確か、人間界のことわざだよな？いい言葉だ。まあ、これは俺と下僕たちとのスキンシップだ。お前だって、リアスに可愛がってもらってるんだろ？」

ブーメラン再び、一誠もう少しマシなこと言え。

確かに昔から英雄は女を囲みたがっていたな。「私の女になれ」と言われた日には、イラっとして虐殺してたけど。

「何が英雄だ！お前なんか、ただの種まき鳥野郎じゃねえか！火の鳥のフェニックス？ハハハ！まさに焼き鳥だぜ！」

「ふふっ、くはは！一誠のくせに的を得てるじゃないか」

一誠の兆発にライザーは憤怒の顔になる。

「焼き鳥!?!?!、この下級悪魔ああああ!!調子こきやがって!上級悪魔に対して態度がなつてなねえぜ!リアス、下級悪魔の教育はどうなつてんだ!?!」

リアスは知るかとそっぽを向く。

「焼き鳥野郎!てめえなんざ、俺のブーステッド・ギアでぶっ倒してやる!ゲームなんて必要ねえさ!俺がこの場で全員倒してやらあ!」

『Boost!!』

一誠の籠手から音声が発せられる。

それによって一誠の力が上がる。

だけど、まだまだね。

「ミラ。やれ」

「はい、ライザーさま」

ライザーが小柄で童顔な棍を持った女に命令を下す。

「意気込みよし、だがな一誠」

余裕をカマしている一誠はすでに懐に入られた女に気づいてすらない。

私は、一誠の足を掴み引きずり倒し、目標が消えて困惑するミラという女の首を掴む。

「一誠、お前は調子に乗りすぎだ。力量も解らないくせに、この女を甘

く見すぎている。すぐ熱くなるな。もつと、冷静に物事を判断しやがれ。神器すらまだまとも扱えてないんだ。その程度できなければお前はすぐに命を落とすぞ。転生させてもらったのに、そんなに死にたいなら2度目の死を受けてみるか？」

ヒツと誰かが声を出す。

それほどに部室の中の気温が落ちたような冷たい殺気。首を解放されたミラは近くでその殺気を受け、震える。

その殺気もすぐに収まり、解放されたミラは息が上手く吸えないでいた。

一誠は私の言葉で落ち込んでいる。

「おつとすまん、ミラといったかさっきの踏み込みは中々に良かったわ。これからも精進しなさい。でももう少し周りに気を配りなさい、あなたの気配の読み方は穴だらけだったかね」

彼女の頭を撫でながら、アドバイスをしてあげる。

少し困惑していた彼女だったが。

「あ、は、はい。ありがとうございます」

そう言って、ライザーの元へ戻る。

それを確認して私は確認する。

「で、ゲームは何日後なの？今すぐここでやるわけではないわよね？」

「あ、ああ。リアス、ゲームは十日後でどうだ？お前もその期間なら準備はできるだろ？」

「…私にハンデをくれるというの？」

「嫌か？屈辱か？自分の感情だけで勝てるほど『レーティングゲーム』は甘くないぞ。彼女も言っていたが下僕が神器すらまともに扱えなければ即敗北だ。初めてのゲームに臨むキミが下僕たちと修行を行っても何らおかしくない。いくら才能があろうと、いくら神器が強かろうが、初戦で力を思う存分に引き出せず負けた奴らを何度も見てきたぞ」

ライザーの言葉にリアスは何も言わず黙って聞いていた。

「――十日。キミならそれだけあれば下僕を何とかできるだろう」

ライザーの視線が一誠へ移る。

「リアスに恥をかかせるなよ、リアスの『兵士』。お前の一撃がリアスの一撃なんだよ」

「――っ！」

その言葉は、リアスを想っての一言だとすぐに理解できた。

「リアス、次はゲームで会おう。それと、俺の下僕へのアドバイスをしてくれてありがとう」

「おや？きちんと礼が言えるのだな。そこは高く評価できるわね」

「ふっ、言ってくれる。また機会があれば下僕たちへ指導して欲しいものだ」

「機会があったらね」

その言葉を聞き、魔法陣へ女たちと光の中へと。





## 15話

＋－イツセー side－＋

「くそ…」

俺は自室のベッドで横になりながら必死に怒りと悔しさを押さえ込もうとしていた。

あのあと、悪魔の仕事は中止に、部長と朱乃さん、そして月闇は作戦会議で旧校舎の奥へ行ってしまった。部長にとっても初陣だからな。残り十日後。多々それだけの時間でライザーとその下僕たちと戦えるほど強くなれるのかな？

つか、部長の前でカツコつけた上に、ライザーを挑発し、訳も分からないうちに月闇に倒されていた。

そして、あの言葉。

『一誠、お前は調子に乗りすぎだ。力量も解らないくせに、この女を甘く見すぎている。すぐ熱くなるな。もっと、冷静に物事を判断しやがれ。神器すらまだまともに扱えてないんだ。その程度できなければお前はすぐに命を落とすぞ。転生させてもらったのに、そんなに死にたいなら2度目の死を受けてみるか？』

あの冷たい殺気を覚えている。思い出しただけでも震えてしまっただけだ。

だけど、それ以上に自分が弱いことを痛感させられた。

最強の神器を手に入れたと浮かれてたんだ俺は。

あの時、懐に入り込まれたのに全く気付かなかった。相手が女の子だからって油断してたんだ。公式戦にも出てる相手が弱い訳無い

じゃないか…。

うわああああ！思い出しただけでも悔しくて恥ずかしくて死にそうだ！

神器を持っていても宝の持ち腐れだ。

俺の夢。ハーレム王。ハーレムを実現した悪魔。ライザー。その差はなんだ？

…力、だよな。いや、生まれもあるか。才能も。俺にはどれも無い。月闇の強さを思い出す。

教会を吹き飛ばすほどの凄まじい破壊の嵐。遠くでも感じる重圧。

アイツに聞いたらどやってその力を手に入れたか教えてくれるかな？

あれほどの力、並大抵の事でて入れるのは無理だ。

「あークソー！」

俺はベツトから飛び起き、頭をくしゃくしゃとかいた。

部長はまだ結婚したくないといった。相手がライザーじゃ嫌だといった。婚約を解消するためにライザーと戦うと決めた。上級悪魔同士、家柄とか小難しいことはよくわからないけど、俺は部長のために戦うだけだ！

部長には恩義がある。それこそたくさん、部長のために戦いたい。少しでも部長の力にならないとな！

よし、うだうだ考えるのやめだ！明日の朝からトレーニングを倍にして頑張るぞ！

朝、4時

「目覚めのエルボー」

「いふお!？」

「ふげほっ! な、なんだ一体? てか、入った鳩尾入った…。  
って、

「な、なぜ月闇が…」

「昨日話し合って、残り十日間しかないから山籠りすることに決定したから。気持ちよく起きるために私が起こしに来てあげたけど、どう?」

「おう、気持ちよすぎて昇天しかけたぜ…」

準備をして、玄関を開けると部活のみんながすでに集まっており、魔法陣で山のふもとへ転移した。

「よし、じゃあ一誠このリュックをつけれ」

「お、重!?! 何が入ってるんだコレ! めちゃくちゃ重いぞ!?!」

「鉄球」

「なぜ!?!」

「もう、修行が始まっているのよ! 何もせず山登っても大して効果無いでしょっ!?!」

「そうか! そうだよな一瞬嫌がらせでやってるのかと思ったぜ」

「ちよろい」

「おい、くら」

俺の修行は月闇の嫌がらせから始まった…結局、部長が許可したらリユックそのままですけどね！

ぐおおお…。目的地へ行くまでに死んじゃう…。

「…あの私も手伝いますから」

「いいのよ、イツセーはあれぐらいこなさないと強くなれないわ」

アーシア天使。部長は鬼つすね。

ちなみに俺の荷物は時間が経つと月闇が追加してくる。

最初はリユック、両手に重りの鉄製腕輪、右足に足かせ鉄球付き、そして、鉄下駄。

ちよ、ほんと、これ、死ぬ…。

「部長、山菜を摘んできました。夜の食材にしましょう」

そう言いながらイケメンが通り過ぎていく。コイツは鉄下駄以外一緒に装備なのにスイスイと登っていく。

「…お先に」

さらに横を俺以上の大きさのリユック、巨大な鉄製腕輪、右足の鉄球は俺の3倍くらいある。そして鉄下駄。

ぐはっ！怪力少女、ここに極まる！つてか、負けてらんねえ。

「うおりやあああ!!!」

「リアスークマとイノシシゲットしたからこれも食べよー」

「ふほお?」

クマを引きずり、イノシシを担ぐ月闇にビビって俺は倒れた。目的地の別荘にたどり着いたとき左足にも鉄球がついていた。ぜーはー、げほごほ!マジ死ぬ!死んでしまう!!

木造の別荘は、グレモリー家の所有物らしい。

普段は魔力で風景に隠れ、人前には現れない仕組みだそうだ。疲れて床と友達になっていると、みんな動きやすい服装に着替える。そうで女性陣は2階へ行った。

「僕も着替えてくるね」

きばも青色のジャージを手にして1階の浴室へ向かった。

「覗かないでね」

「マジで殴るぞ、この野郎!!」

ほんとやめろよなソレ、最近女子たちで俺らの組み合わせの話が流行りだしてるんだよ。これ以上腐海に餌ばら撒くのやめろ。集まるだろ。

美男子と野獣が良かったとか俺にわよくわからん。

着替えたみんなが集まってくる。

赤いジャージの部長。

黒いジャージの朱乃さん。

白いジャージのアーシア。

黄色いジャージの小猫ちゃん。

みんな可愛いな。あれ?月闇がない。

最後に月闇が出てきた。みんなと同じようにジャージかと思えば白黒の衣装のを着ていた。聞いたら戦闘用の服だそうだ。

＋―イツセー side out―＋

一誠にはまず、1日目は部活メンバーとそれぞれ修行させる。

私は訓練用に使う魔術を組み立てていく。

これが終われば、料理を作らなければ。

あ？出来るかだつて？あのな、流石の私も家事を全部黒歌に任せているわけではないからな。料理くらい普通に作れるわ。

「うおおおおお！美味ええええ！マジ美味しい」

とりあえず、この十日間は料理の材料は自給自足で賄っていく。

祐斗が採ってきた山菜なかなかうまいな。

クマもイノシシ久々に食べた。

「さて、イツセー。今日一日修行してみてどうだったかしら？」

リアスがお茶を飲んだあとに一誠へ聞く。

「…俺が一番弱かったです」

「そうね。それは确实ね」

「朱乃、祐斗、小猫はゲームの経験がなくても実戦経験が豊富だから、感じをつかめば戦えるでしょう。あなたとアジアは実践経験が皆無に等しいわ。それでもアジアの回復、あなたのブーステッド・ギ

アは無視できない。相手はもそれは理解しているはず。最低でも相手から逃げられるぐらいの力は欲しいわ」

「逃げるって…そんなに難しいんですか？」

「当たり前だろ一誠。実力が相手の方が上なら、馬鹿みたいに背を向けて逃げてみる。狙ってくださいって言ってるようなもんだろ？そうだな、一誠は逃げるより、どれだけ攻撃を躲して相手に一撃を叩き込めるかだな。明日、私が相手をしてやろう。どれだけ避けられるか見てやる」

「まじっすか」

「強くなりたいたんだろ？だったら、大人しく受けとけ。きっと為になるだろう。アーシアもコレには参加しなさい。避けられるだけといっても、襲われても、味方が来るまで時間稼ぎができれば上々よ。」

「わかりました。ルーミアさん」

「おう、俺がどれだけできるか見せてやるぜ！」

弾幕ごっこの応用で鍛えれば、そこそこ避けれるようにはなるだろう。

「ああ、それと朱乃、リアス。お前たちはこのカードを持っておけ」

二人に黒い魔法陣が書かれたカードを渡す。

「これは、あなたが作っていたものかしら？」

「そうよ。そのカードを持ちながら、魔力で攻撃をすると、1〜100

の数字が浮かぶわ。数字が高いと、その分だけ魔力を無駄に消費していることになる。10以内なら満点だが、この期間中に最低でも20以内を目指せ。この方法で、魔力の無駄遣いを減らすんだ。無駄に消費すればするほど、攻撃回数は減る。逆に消費を減らせれば連続での攻撃が可能になり、通女の攻撃の威力を上げることにも可能になる。そして、裏面を试着みる」

裏返したカードには赤い魔法陣が書かれている。

二人ののカードに数字が浮かぶ。

「それも1〜100までの数字で現れるが、その意味は、通常時に放出している魔力が書かれている。出来るだけ漏れ出す魔力を抑えろ。無意識下に慣れてないと微量だが放出しているものだ」

「私は78と出てるわ…こんなに放出しているのね…」

「あらあら、私は56と出てますわ。自信があつたのですけど…」

落ち込む二人だが、ルーミアが続ける。

「普通は気づかないものだ。それを可視化したものがそれだ。一誠なんてそのカード持ったら100と表示されるはずだ」

「マジかよ…それは凹むぞ」

「言つとくが、私が見た限り、グレイファイア辺りなら放出している魔力は5未満だろう」

驚いた顔になるリアスたちだが、あれほどの強者ならばその程度のこととは当たり前だろう。ちなみに私は0だ。索敵魔術を使用されても、普通の人間と同じレベルで魔力を察知されないため、昔の私には



必須スキルだった。

「まだ、二人分しか出来てないが4日目までには他の奴らの分も用意しよう」

「ありがとう、ルーミア。ここまでしてくれるなんて」

「当たり前だ。なんせゲーム参加するといったが、ライザーを相手にするのは、一誠。お前だからな。精々死ぬ気で頑張れ」

「えっ！俺かよ!?月闇が相手にした方が必勝は確実じゃねーか!」

怒鳴る一誠だが、私にも考えくらいある。

「アホが、眷属でもない私が倒してしまっても、『助っ人が強すぎてライザーが負けた』って事実が残るだけだ。リアスと、その眷属が勝つたという結果にはならない。お前らの問題なのに私が活躍して終わらせてどうする。実力が無く、私に縋り付いたようにしか周りには映らんぞ?」

「そ、それはそうだが…」

「なんだ一誠。お前の覚悟はその程度か。リアスを助けたくて強くなりたいのではないのか?だったらこの修行自体が無駄だ。すぐに終了して帰宅するぞ。ゲームは私に全部任せればいい。私一人で全てを片付けてやる。どうする?」

「——ッ!」

歯を食い縛る一誠。リアスたちは私が一誠に投げ掛けている言葉は理解している。

だから一誠の言葉を待つ。

「お、俺は。リアス部長を助けたい！強くなりたい！あんな奴に部長を渡せるか！俺が絶対にぶっ倒す!!月閨、ごめん。お前が言ったとおりだ。だから、俺を強くしてくださいお願いします！」

「それでいい。絶対に倒せよ」

「はい！」

「では、一誠。今から悪魔の弱点と、フェニックスの再生についての講義をする。まずは知識からだ。徹底的に教え込むから根を上げずについて来い」

「え？マジで？わたくし馬鹿だからすぐ忘れちゃうかもヨ？」

ニヤリとルーミアが笑う。

「忘れないように徹底的にお前の魂に刻み込んでやるから覚悟しなさい」

「記憶じゃないの!?あ、俺避ける練習したいなーなんて」

「んじゃあ、同時進行ね。外行くわよ一誠」

「わああああ！待って！待ってください！月閨様！何その弾幕の数!!俺死んじやう！死んじやうkギヤアアアアア!!」

こうして、修行1日目は一誠の悲鳴が続く中終わっていった。

## 16話

二日目。

昨日の夜、イツセーは日が変わるまで悪魔の弱点とフェニックスの再生について教え込まれながら弾幕を避けるという、酷いことになっていた。

「ふむ、一誠。フェニックスを倒す有効な手段答えてみる」

「ふへへ、いいぜえ。念仏唱えながら、手持ちの十字架投げつつ、トドメに聖水をかけてやりながら笑顔で精神攻撃できればオーケーなんだろう?」

目が虚ろになりながら、イツセーが答える。

「自分もダメージを受けるがいいのか?」

「ハッハアアー!構うもんか向こうの方がダメージは上だア。些細な痛みなんか気にするもんかYO!!★!」

「ふむ、完璧だな」

「アホか!!」

リアスに頭を叩かれた痛い。何をする。

「完璧だろう?」

「追い込みすぎて人格まで可笑しいことになってるじゃない:元に戻

してきなさい」

「イヤや、オカン。私絶対にこのまま一誠に戦ってもらおうもん」

「誰がオカンよ！それにもんじやありません。これからの修行で支障が出そうじゃない…。ほら、文句言わずにさっさと元に戻す！」

「えー、むうー。仕方ない。最悪弱点でも覚えておけばいいか」

私は文句を言いつつ。一誠の人格を蘇生にかかると。

ちなみに戻し方は楽だ。

リアス  
オカンの胸をはだけさせ、一誠にぶつけておいた。

「ふ、これは…くあwせdrftgyふじこーp!!ふおっおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!! ほんやひやひやひやひや!!」（。△。）○ミ。おっぱい！おっ  
ぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！おっぱい。（。△。）○ミ。  
おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっぱい！  
おっぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！（。△。）○ミ。おっ  
ぱい！おっぱい！おっぱい！おっぱい！！！！

もどった。(。▽。)

さて、今日の午前中はアーシアと一誠の勉強会だ。悪魔の知識。悪魔の仇敵である、神が率いる天使のメンバー。墮天使の幹部の名前。そして、悪魔の王四大魔王についてだ。

ちなみに墮天使は神器所有者を監視しており、一誠やアーシアが死んだのはこやつらのせいでもある。もう一度言おうアーシアが死んだのは奴らのせいだ。

影から大剣を出し。

「ちよつと、『神の子を見張る者』潰してくる」

「コンビニに行くみたいにな、気軽に倒しに行かないで頂戴…」

この後、皆に羽交い締めになされ、行くのは今回は諦めた。

午後からの訓練に朱乃とリアスの魔力コントロールの修行を見てやる。

二人はカードを持ちながら攻撃魔力を放つ。

「あら？あら…、78と出てますわ。これほど無駄に消費してたのですね」

「ええ、私が今見ただけでも無駄が多かったわね。しかもその雷、連撃で打てないでしょう？魔力を操れるのに無駄を省かなければ勿体なさすぎるわ」

「私は89って、ホントなのこれ？」

「リアスの消滅？滅びの力だったかしら？鍛えれば、相手の弱点の有

無関係なしに消滅させることも可能はずよ。威力を抑えて広範囲に放つ殲滅用の攻撃としても使えると思わ」

二人は私のアドバイスを聞きながら修行を続ける。

今日の成果は、

朱乃が無駄な魔力消費が51、体から放出される魔力は35まで抑えた。

リアスは65と62と成果が出ていた。

それと、今日予定していたアーシアの弾幕による修行は別の日にすることにした。

三日目

今日は祐斗の修行を手伝う。

「祐斗、お前の神器は魔剣創造ソード・パースと聞いている」

「うん、そうだよ」

私は影から大剣を出し、地面に寝かせる。

「この私の剣も魔剣なのはわかるだろう？名は『穢れた十字架デネブラエ・ルクス』と呼んでいる。まあ、私がかつてに付けた名だが無いよりましだろう。剣の効果は相手の血を啜り、魂を切り裂き、闇と光を操ることが出来る。これに近いものをお前の神器で作ってもらおう」

「前に見た時から思っていました、似た様な魔剣はあるにはあるんですけど、この魔剣と比較したら今まで見た魔剣が玩具に見えますね…。これを創造するのはとても…」

「贗作でいいんだ、それに近いものが作ればいい。それに、ちよつと

「一番頑丈な魔剣を一本作ってみろ」

祐斗は言われた通りの魔剣を創造して渡す。

「見た目はいい、だがな祐斗見た目だけだ、多少は頑丈のようだが」

手刀を魔剣に放つ。

パキン

音を立てあつけなく折れてしまう。

呆然とその様子を見ている祐斗。

「こんな感じで、創った時の芯が脆い。コンクリートに芯となる鉄棒や鉄筋を入れるだろうか？あれと似たように芯も強化しとけ。し、聖剣と打ち合えば今の魔剣ではすぐ折れるぞ」

聖剣と聞いて顔を一瞬歪めた祐斗だが、すぐに言われた修行に取り掛かる。

ふむ、聖剣に何か強い憎しみを感じた。

隠したようだが、負の感情には敏感なのだ。例えそれが心の闇であろうと、私には隠せんぞ。

まあ、その問題は祐斗の問題だ。私が関わるべきではないだろう。今は様子見だ。今はな。

一日、魔剣造りをしていた祐斗だが、結果は剣の芯は強くなり折れにくくなった。私の魔剣の贋作は何回か作っていたが、見た目はそっくりでも効果が大了なものがない魔剣が出来ていた。明日は剣術に打ち込んでもらおう。一日置きに魔剣創造をやらせることにする。

#### 四日目

今日は小猫の修行だ。

「小猫、今日は太極拳を学んでもらうわ。最初は仙術を学ばせても良かったのだけど、まだ恐怖があるでしょう？それに教えるなら黒歌がいいでしょう」

「わかりました。月闇姉さま。ご指導お願いします」

「ん、オーケーオーケー。まあ、太極拳といっても知り合いの門番がやってた奴の見様見真似だから、細かな技術は小猫自身が鍛えてちようだい」

「はい、わかりました」

まずは、小猫に腕試しとして、軽く組手をする。力は中々に強いが、正面から受けても私を動かせるほどではないが。色々な格闘技も習っていたようだ。しかし、技術的な面で隙を付ける部分はまだあるので、今後に期待だ。見様見真似の太極拳をやっていく、その動きを盗み、すぐ組手に入れてきた。

ふむ、これに魔力や仙術による身体強化を取り入れれば流石の私でも、正面から受けるのはキツイだろう。

午前は組手、午後からは細かな動きについて見ていき、私が知っている人体のどの部分を攻撃すれば、痛みで動きが障害するかを教えていった。

久々に体を動かさせて楽しかった。たまに小猫と組手をするのもいいかもしれない。

それと、カードが出来上がったので、みんなに夕食の時に配っていた。

## 五日目

さてさて今日は、アーシアの神器の強化と避ける技術と自身を守る



技術を教えることにする。

今のアーシアは触れることでしか神器の効果が現れない。そして、自分の身を守るすべがほぼない。

「アーシア、あなたの神器は、遠くの相手も癒しの力を投げることで回復ができると思うわ。予想だから確証はないけどね」

「ほんとうですか!?!それができれば、もっとみんなの役に立つことができます!」

嬉しそうに微笑むアーシア。

それをずっと見ているのもいいが、神器の強化を始める。

まず、神器の癒しの力を手元で維持させ、それを私に投げるといったものだ。

手元で、力を維持するというのは、初めての試みで、苦戦していたが1時間もあればできるようになっていた。

今度は相手に投げるだが、これも苦戦中だ。すでに2時間が経とうとしている。

流石に疲れが見え始め、出来るのもあと、1、2回が限界だろう。私は少し思いついた事があるのでソレを実践する。

「アーシア力は溜めたな。なら、見ていろ」

そう言い、私は爪で腕に縦に肌を切った傷は痛々しく。血が溢れる。この程度なら力を込めて即再生することも可能だが、傷をそのままにしておく。

「る、ルーミアさん!?!早く傷を!」

焦った声を出す。アーシアは溜めていた力を私に投げた。いや、これは力が転移したというべきか。神器は思いに応える。アーシアの

傷を治したいという思いに、溜めていた癒しの力が離れた私に一瞬で移動し、作用したのだ。

「ふむ、成功のようだな」

「え、あ！ホントです！癒しがルーミアさんまで行きました！」

喜んでいたアジアだが、すぐに顔を顰め、私に近づき。

「でも、こんなこと二度としないでくださいねルーミアさん！」

「だが、成功しただろう？それに私にとってこの程度どうでもない。再生させようと思えばすぐにできるのよ」

「それでもです！ルーミアさんが傷つくのは私は嫌です…」

顔を伏せながら、悲しそうに言うアジア。

「わかったわ。二度としないから許してアジア」

アジアの頭を撫でながら謝る私。

その私を笑顔で許してくれた。

午前はこれで終了し、午後まで休み。午後からは弾幕を避ける練習と護身術がある程度教えた。相手を傷つけるのを嫌そうにしていたが、それで自分が傷ついてどうするかと納得させ、続ける。ここ数日筋トレをさせていたのである程度動けていた。

成果は上々と言っておこう。

## 17話

今日で6日目だ。

昨日に引き続きのアーシアと、2日目にも見た朱乃を担当する。

「さて、今日してもらおう事は、無駄な魔力消費を控え、魔力球をいくつ作れるかやってみようわ。朱乃は普通に魔力球を、アーシアは回復の力でそれをやってみなさい。っと、その前に二人のカードを見せて。」

朱乃 消費 31

放出 28

アーシア 消費 47

放出 40

「ふむ、これがどこまで伸びるか期待ね。じゃあ、早速。魔力球を作つてちょうだい。」

「わかりました！ルーミアさん！」

「了解しました。高評価を貰える様に頑張りますわね」

アーシアと朱乃は集中し始める。

アーシアの周りに癒しの力でできた魔力球が2個浮かぶ。一方朱乃は12個の魔力球が出来ていた。

「むう。アーシアはともかく朱乃少ない」

「そう、言われ、ましても、これが、限界でして…」

息が切れ始めた朱乃を見て。

「それは消費魔力が多いからだよ。アーシアは5個、朱乃は30個。今日中にできなかつたらお仕置きね?」

「!?!」

「じゃあ、私はその辺散歩してくるから、がんばってねー」

「が、頑張りましょう朱乃さん…」

「ええ…。お仕置きされるのはちよつと…する方が好きなんですけど私」

先程からヤバイ気配を感じる。

二人からある程度離れた私は、認識・察知不可の結界を張る。

強度はそれなりだが、多分これでは奴を閉じ込めるのは不可能だろう。

だが、足止めはできる。

しかし、その必要はなくなった。

「お前、何者?」

なんか際どい衣装の少女が話しかけてきた。

「人に名を尋ねるときは、自分から名乗るものよ?」

「我、オーフィス。お前、何？妖怪？それにしては、力が強すぎる」

リボンの効力はこのレベルだと効かないか…てか、もし、コイツが戦いに来たならマズイわ…この結果だつて数秒持たないでしょうね。それに、全力でやりあつたらここら一带の緑が地図上から消失する。いや、それ以上の被害が出るだろう。昔、紫と全力全開で戦つた時と同レベル。

あれ？それつて日本沈むくね？マズイそれはマズイわ。  
戦いに持ち込まないように…。

「私は、月闇ルーミア。ルーミアでいいわ」

「ルーミア、強い、その強さ我に近い。だから、グレートレッドを倒すのを手伝つて欲しい」

お、おや？共闘して倒そう的な言葉が来た。

真剣に見つめてくるオーフィス…あれ？なんか可愛い。

いや、それより。

「真なる赤龍神帝、つか…どうしてソイツを倒したいのかしら？」

「我、故郷の次元の狭間に戻る、真の静寂を得たい。だから、グレートレッド倒さなければならぬ」

「ふーん。静寂を得たいなら。次元の狭間じゃなくてもいいんじゃないかな？例えば私の影の中とか。寝るにはちよつどいいと思うけど。真つ暗で、音なんてしないからね」

「…そこ静寂？」

「うん」

「なら、そこに住む」

「え…いや、まあ、別にいいけど、困ること別ないし、でも、えつ、マジで？仲間とかいないの？勝手にここ来たら迷惑かかるんじゃない？」

「仲間、いる。我、グレートレッド倒すために組織作った。禍カオス・ブリゲードの団」

「いや、組織つくたって…オフィスのレベルの奴らが束でいるならわかるが、そいつらって、私より強い？」

フルフルと首を横に振りながら答える。

「我、次元の狭間から出てきて、我、以外に、ルーミアが、一番強い」

「はあ…、それってオフィスの力利用として近づいた集団だと思うわよ。オフィスのその辺疎そうだから、グレートレッド倒すとか言っつて、近づいてきた奴らよ。きつと」

「…我、騙された？」

「うん」

寂しそうな表情になるオフィス。

やばい、可愛い。

私は、オフィスの頭を撫でながら。

「その組織抜けたら私のところに来なさい。私の影の中を第二の故郷にすればいいわ」

というか、そのへんな組織にこのレベルの化け物がいること自体が危険だ。

私の手元に置いてたほうが安全だ。可愛いし。

「分かった。抜けたら、また来る」

あまり表情が変わらないオーフィスだが、この時は笑ってその場から消えた。

何あの可愛い生き物。

結界を解除し、帰ろうとしたらイノシシがいたので二頭狩って帰ろうとすると。

「我、帰ってきた」

「早いな、おい」

『我、組織抜ける』、と手紙を置いてきた」

「近所に遊びに行く子供じゃないんだから、いいのかそれで」

「途中で曹操が来たけど、一撃入れて、額に『肉』と、書いておいた」

「本当にいいのそれで!?!てかなんで書いたし!」

「ノリ?」

「なぜ、疑問形なの…。誰かは知らんが曹操どんまい」

「では、我、しばらく眠る」

「はいはい、どうぞ。言ったの私だから全然いいけど、あっ…:言っとく

ことが…つて入っちゃったか…まあ、今度いいつか」

影に入ったオーフィスを呆れ顔で見ながら、言い忘れた事をどうでもいように呟くルーミアだが、言い忘れたこと。

#### ◆影を操る能力

・攻撃——ありとあらゆる影を操り、実体化させ、攻撃が可能である。

・捕食——人間を捕食するときに使用。

・保存——膨大な空間が有り、モノを収納できる。大剣などを収納している。

・捕縛——影に取り入れた相手を捕縛し、1時間おきに、10分の1の体力もしくは、魔力や妖力などを摂取する。

・共存——許可した相手を影に入れることで、一緒に行動を共にすることができる。

しかし、1日に置きに100分の1の体力もしくは、魔力や妖力などを摂取する。

闇を操る能力の派生、影を操る能力の主な力がこれに当てはまる。

オーフィスレベルの強者なら100分の1程度の力の摂取など、すぐに回復するだろうから問題ないだろうと思っていた。

しかし、無限の龍神であるオーフィスの100分1の力の摂取がどれほど規格外なのかを知るのは、少し先の話である。

ルーミアはそれから、山の主を競い合っていた、氷柱を出す黒い巨大馬と暴れまわる緑の毛の大猿と火炎液吐く巨大な青怪鳥を狩り。帰宅した。

帰宅し、私が仕留めた獲物を見てリアスが「青怪鳥、緑毛獣、氷結馬も哀れね…この子と出会ってしまうなんて…」と、何やら失礼なことを呟いていたので叩いておいた。

ちなみに、魔力球4個で力尽きたアジアは30分間くすぐりを、27個で死にかけていた朱乃はお尻ペンペン（100回魔力付き）を



してあげた。朱乃が何かに目覚めそうだったので、嬌声を上げ始めた  
67回目でやめておいた。

## 7日目

1週間目の今日はリアスだ。

「さて、リアス。チェス、将棋、オセロ、トランプ好きなのを選べ」

「えっと、ならチェスで。これで何を？」

「戦略に必要なのは、冷静な判断力と優秀な頭脳、あと、集中力かな？  
まあ、そんな感じだ。で、お前にはゲームをして、頭を働かせつつ、魔  
力球を作り、あつ、消滅の魔力で作ってね。それでえっと…ああ、魔  
力球を維持する修行だ。球が維持できなかつたり、揺らぎが生じた  
り、ゲームに負けたりしたらその都度に、そうだな…恥ずかしい写真。  
主にコスプレさせてサーゼクスに送るから」

「う、嘘よね…？ただでさえ、キツそうな修行なのに、その罰ゲームは  
お願いだから考え直して…！」

「さっ、始めるヨー」

「無視しないでよ!?!ああ、嘘だと言ってよ…色々死んじやう。誰か助  
けて…」

ちなみに、20枚の写真が撮られ、サーゼクスに送られたと明記し  
ておこう。

アーシアと朱乃から借りたシスター服と巫女服から始まり、ネコミ  
ミメイド、ナース、チャイナドレス、季節はずれのミニスカサンタ、旧  
スク、セーラー服、ミニスカポリス、バニー、ウエディングドレス、ピ

キニアーマー、裸エプロン、ミニ着物、ぴっちりボディースーツ、ゴスロリ風、小悪魔風、魔女風、女王様風、オーフィス風。

最後のは「何これ？」とか言われたが、最近であれが一番印象に乗っていた衣装だ。

そして、リアスは羞恥心で真っ赤になりながら悶えている。

全部可愛い系かエロ系のポーズで撮ったからだろう。

追いうちに、こないだの一誠に迫ったりリアスのビデオを流し、許容量オーバーで気絶した。ちよつと楽しかったのは内緒だ。

しかし、冥界では喜び、泣き、狂った悲鳴がサーゼクスの部屋から聞こえていたらしいが関係ないことだろう。うん。

## 18話

7日目 午後

リアスを散々弄り倒し、一誠の修行でも見てやろうかと移動し始めたところで、体に違和感が生じ始める。

オフィスが影に入り1日が経ち、100分の1のオフィスの力を摂取しだしたのだ。

しかし、力の摂取が止まらない。

それもそのはず、無限の龍神ウロボロス・ドラゴンオフィス。

彼女自身のことを聞いたとき、名前しか聞かなかった。

迂闊にも無限の龍神ウロボロス・ドラゴンのことを知識から出していなかったのだ。名の通り無限の力を持つことを知らなかった。

力が溢れ出し、マズイと判断したルーミアは転移魔術を発動させる。

どこか人がいない場所へと、飛ぼうとして冥界へ飛んだ。

”影伝い”で1度しか飛ばなかった冥界に何故転移できたか疑問だが、今のでゴツソリ魔力を消費したのに、1秒経たずに回復し、器から水が溢れるように魔力が体から漏れ出す。

肌が破け、内臓器官弾け、血だまりに倒れこんでも力が溢れる。

影を操る能力に気を回す余裕が一切なく、力の摂取が止められない。

体が一から作り直される様な感覚。無限の力である、【死と再生】  
【不老不死】を手に入れたせいだ。

体が、死と再生を繰り返しているのだ。



思い出す

黒く黒く

禍々しい

穢れに

身を

包まれた

時の

激痛を

泣き叫ぶ

私を

私がる\*ミ\*で\*だった頃の記憶を

この程度の痛み大した事ではない。

あの絶望に比べたら、死すらぬるい。

激痛が収まった。

私は立ち上がり、体を確認する。

大した問題はない。精々無限の力を手に入れた程度だ。

私はリアスたちの元に戻るため転移する。

誰もいなくなつた冥界の荒野に大量の黒く、巨大な十字架が残されていた。

一方、オフィスは静寂の中で、時間にしては数秒も満たない時間だが、一人の少女の姿が頭の中に流れ込んできた。

腰まで伸ばした眩い金髪 of 髪。

海を思わせる蒼い瞳。

無邪気な笑顔を浮かべた少女。

荒野に座り込み、呆然とする少女

一瞬だけ見た少女はルーミアに似ていた気がした。

## 8日目

昨日は予想外なことがあったが、問題はなかったもので、今日こそは一誠の修行を見に行つた。

「月闇！新技できたんだ！試させてくれ！」

一誠の元へ行くと、そんなことを言いながら肩に手を置いて頼み込んでくる。

神器を仕舞わんか、少しゴツつときただろうに。

しかし、神器に魔力が少し纏っていた。掴まれた左肩にも残滓が残っているが、新技に関係してるのだろうか？

そして、この馬鹿はやらかしてくれた。

「いくぜ月闇！洋服崩壊（ドレス・ブレイク）!!」

私が着ていた黒白の洋服に左肩に残っていた魔力が一瞬で行き渡り下着ごと弾けた。

瞬時に理解した私は闇を身に纏い、簡易の服を作った。

馬鹿野郎に私の裸体は見えなかったはずだ。

「あー！せつかく破いたのに一瞬で隠すとか！さすが月やm「おい」うえ？」

「You can't escape!」

「ひよ!?!」

一誠を瞬時に掴み。

ドゴオン!! 1 HIT!!

「Ya eh! Woo!」

ゴガン!! 2 HIT!!

「HyperBomm!!」



ズツゴオンツツツ!!! 3 H I T!!

「ぐっはあ!!」

「Stirb, du d·mllicher Idiot!」

バックドロップの2連発の後にとどめにジャンプをして勢い良くパワーボムを喰らわせてやった。この後、30回に続けて行われ、見るも無残な姿になった一誠は別荘の入口に吊るされたのであった。

その日の夜、まだ吊るされている一誠に、使用を禁じられていたらしい神器を使用したことでリアスに怒られていた。

その後何やら話していたようだが、吊るされたままの一誠を抱きしめているリアスはなんかシニールだった。

## 9日目

さて、今日はゲームのためのチームワークがどれほどできるかを試してみようと思う。

だから、ある程度本気で行かせてもらおう。

「てなわけで、本気で来てねみんな。少しでも手加減したり、油断したりしたら殺っちゃうかもだから♪」

少し動揺を見せる皆を置いて、まず祐斗に迫る。

瞬時に魔剣を作り出した祐斗、私は手刀を繰り出し、祐斗は私が素手なのに驚くが、剣で受け止める。

ガキインツツ!!

素手と剣なのに対してありえない音が響く。

その音で、周りは瞬時に間を取り、戦闘に備える。

リアスが一番離れ、指示を出しながら魔力球を生成し、朱乃は空へ飛び上がり魔力攻撃を準備する。

アーシアもリアスと同じくらい離れ、癒しの魔力球5個作り出し待機する。

一誠は、神器を出し力が溜まるのを待つ。

小猫は私の背後に回り、祐斗を支援するために踏み込む。

「…やあー！」

小猫が正拳を突き。

「はあ!!！」

祐斗が首を一閃するように剣で切り裂く。

小猫と祐斗の攻撃が直撃する。

ガキイツ！ズドオツ！と音が鳴り響く、ルーミアは一步もその場を動かずに攻撃を受けた。

「本気で来いといっただろう？下級悪魔が倒せる程度の攻撃では、私にかすり傷すら付けられんぞ？」

一步、祐斗が見えたのは踏み込みまで。右頬に痛みが走り、地面を何度もバウンドしながら吹き飛ばされる。

「ガハッ！」

軽く見ても全身打撲に骨が数本逝っただろう。

その様子を呆然と見ていた小猫に正拳を繰り出す。

「あぐうッ！」

本気の戦闘で寸止めなどしない。小猫は水平に吹き飛びゴロゴロと地面を転がる。

体全体にダメージが行き渡るように調節した。今ごろ全身の痛みで指一本すら動かせないだろう。

一撃で満身創痍の二人にアーシアが慌てて力を飛ばす。

傷が回復した二人は、距離を取りながら様子を伺っている。

「雷よ!!」

「喰らいなさい!」

空の朱乃が雷の攻撃を、リアスが魔力球を繰り出す。

私は頭上に結界を張り雷を防ぎ、魔力球は魔力を纏った両手で逸らし、一誠の方へ飛ばす。

身構えていた一誠は瞬時にその場から離脱。

拳大の魔力球が一誠の手に現れる。数日前まで小さな魔力球しか出せなかった一誠がよくここまで、コントロールできるようになったものだ。

先程から聞こえていたBoostの声から察するに12回は溜めたな。

そして、放たれる。

一誠の手から離れた魔力球が強大な魔力砲として私に迫る。

魔理沙の魔砲「ファイナルマスタースパーク」レベルの砲撃だ。

そうだな私も再現してみるかあの砲撃を。魔砲は威力的にダメ、なら。

恋符「マスタースパーク」

虹色の光の奔流が一誠の魔力砲とぶつかる。

拮抗し、互いに削り合う。

が、

一誠の魔力砲が威力負けし、一誠が光に飲まれた。砲撃の後には、全身から出血し、血を吐き出す一誠が倒れていた。それに、混乱したアーシア近づき回復させる。

混乱によって展開していた魔力球は消失し、隙ができた。

ある程度回復した一誠にホツとため息を吐く。ビクツと肩を震わせ、背後の殺気に気づき振り返ると、私の拳を腕を絡めて受け止める。受け止めたものの、衝撃が流せず腕が痛みで動かなくなるアーシア。

私はアーシアの意識を暗転させ、倒す。

### 「二人目」

私の呟きにハツとなった祐斗が冷静さを失い、リアスの指示を聞かず私に突撃してきた。

影から大剣を取り出し、剣の腹で殴る。

受け止めた魔剣がコナゴナに砕け、ゴッ！と音を鳴らし吹き飛んだ。

### 「3人目」

リアスの魔力球が飛び、朱乃の雷と魔力球が同時に私を攻撃する。その間を縫って、小猫が魔力を纏った拳で殴ると見せかけ、蹴りを放つ。

リアスの攻撃を捌きながら、小猫の足を掴み、そのまま朱乃の雷へ投げる。

バチバチッ！

感電した小猫が気絶する。

### 「4人目」

フワリと体を浮かせ朱乃に一瞬で近づく。

飛んだ事に驚いていたようで隙だらけだ、誰が飛べないなんて一言でも言ったよ。

呆れながら赤と黄色の弾幕を自身の周りに展開し一気に解き放つ。全方位に広がった無数弾幕は朱乃の翼にダメージを与え地に落とす。

「5人目」

一人になったリアスへ一誠と同じくマスタースパークを放つ。避けられないと判断したリアスは、前方に防御の魔法陣を出すがあっさり破かれ倒れた。まだ意識があるリアスへ近づき。

「全員で相手して10分持たないなんて、まだまだね」

そう言い、リアスの意識を落とした。

9日目は全員戦闘不可能になったので、この後は休みにした。

## 19話

9日目 午後

「今日の午後は休みにするといったが…あれは嘘だ！」

「あの砲撃のせいで、俺、満身創痕なんですが!？」

「治せばいいでしょ？アーシア」

「はい」

「容赦ないのね…」

「死なないように手加減してやったじゃない」

「死ぬ一歩手前だったんですが、それは…」

「生きてれば問題なし」

「デスヨネー」

「まあ、制限掛けてた割には数日前より動けていたから大丈夫だろ」

「…ん？今聞き捨てならない言葉が」

一誠が、目を見開きながら私を見る。

「制限って言ったか？」

「言ったわね」

「いつから？」

「魔法陣で山の麓に飛んだ時にちよちよいと細工をね」

「制限ってどれくらい？」

「身体能力や魔力諸々10分の1に違和感なく低下させる制限」

「な、なら、俺らって制限外せば、さっきの10倍で戦えるってことか  
!？」

「ええ、午後からは制限外してあげるからゆつくりしておきなさい」

「おう！」

「明日、もう一戦するけどね」

「マジかよ……」

先程の戦いを思い出したのか、不安そうに落ち込む一誠。  
いや、今のうちに慣らしておかないと本番大変なんだが…。

## 10日目

昨日、戦闘を行った場所に再度みんなを集める。

「はい、昨日制限を解除したからちやんと力使えるよね？今日で最終日。全力で私を倒しに来てみなさい」

今度はルーミアに先手を譲るなんて真似はしない。

祐斗の足裏に溜めた魔力が爆発し、一気に近づく。

ルーミアは当然のように、それに反応し、影から出した大剣で受け止める。

「今度は素手で戦うなんてことはしないんだね？」

「本気で戦ってる相手に素手は失礼じゃなくて？」

鏢迫り合いから互いに距離をとり、再度突撃かと思えば。

祐斗は右腕を空へかざす。

そして、

「ソード・パース魔剣創造!!」

ルーミアの頭上に大小様々な魔剣が現れ、加速をつけて降り注ぐ。

私は自分に当たる魔剣だけを弾き、切り裂きながら躲す。

自分の周りが魔剣だらけであまり身動きが取れなくなった所で、空を飛んでいた朱乃が頭上に出来た巨大な雷の魔力球がバチバチと音を立てながら私に降り注ぐ。

1個や2個ではなく、連続で30以上の魔力球が降り注いだ。

私はそれを闇を実体化させ防ぎ、躲す。

そこへ小猫が近づき。

「…ちえいさー」

ズゴオンツ!!!



拳は地面を攻撃し、辺りの地面砕け、隆起する。

咄嗟に私はその攻撃を空へ飛ぶことで躲したつと思つたと同時に小猫が隆起して巨大な岩となった地面を投げてきた。

大剣で切り裂きながら防ぐ私に、朱乃が再度魔力球を飛ばすが、

「カツキーン」

私は慌てることなく魔力球を大剣で打ち返した。

え?といった感じでポカンとした朱乃の顔面にクリーンヒット。見事なピッチャー返しが決まった。

痺れてフラフラした朱乃が緑の光に包まれ復帰する。

地上に控えていたアシアが回復させたのだ。

アシアの周りにはくるくると15個の緑の球が浮いている。回復の力をあそこまで使いこなせていることに、思わず口元が緩む。

ここまでの戦闘で60秒、ちょうど1分である。

「ドラゴンショット!!」

離れた場所にいた一誠から魔力砲が飛ぶ。

昨日の半分の時間しか溜めてないのに、それを上回る砲撃。

赤い魔力じゃなく、桃色の魔力ならスオーライ○ブ○イカーとか付けたら面白そうだ。

一誠の砲撃に気を取られていると、祐斗出した魔剣を次々に小猫が投げてくる。

昨日のように、互いに魔法をぶつけている暇ない。手に魔力を纏わせ、砲撃を無理やり逸らす。そして、油断した一誠に小さな魔力弾をぶつけ、吹き飛ばす。

そして、小猫と祐斗の方を向き。

夜符「ナイトバード」

黒い色の魔力で作られた鳥と青い弾幕が二人を襲う。  
それぞれ被弾し、体勢が崩れた祐斗のところに入。  
足を払い、地面に倒れた祐斗に足を大きく振り上げ、鳩尾に落とす。

「ガハアッ！」

衝撃で地面も凹み、祐斗が血を吹き出す。

そして、同じく体勢を崩した小猫にも近づき、頭に蹴りを放つ。  
こめかみに放たれた蹴りをまともに受け、小猫は昏倒する。

「ドラゴンショットオオオオ!!」

再度、一誠の砲撃が飛び、私がそちらへ気を逸らすと、朱乃が二人を抱え離れる。

フツと、頭上に影が生じる。

紅く燃えるような魔力が絨毯爆撃の様に私と私の周囲へ落ちた。

リアスが放った殲滅用の攻撃と、一誠の砲撃がルーミアを巻き込んで爆発音を響かせる。

手応えはあった、むしろやり過ぎ感を否めなかったリアスだが、魔力の爆発から片腕を失ったルーミアが飛び込んだ。

首を掴まれ、地面へと叩きつけられる。

受身も取れず、叩きつけられたリアスは息ができず咳き込み。

月符「ムーンライトレイ」

ルーミアが放った2本の闇色のレーザーを身に受け気絶した。

右腕を再生させ、アジアに狙いをつけようとすると、私の周りに緑の、回復の魔力球が15個浮かんでおり、私の身を包んだ。

そして、私は血を吹き出す。

過剰に回復させられた私の肉体は悲鳴を上げ、至る所から血が噴き

出し、ミシミシと音が鳴る。

余りにも想定外の攻撃に、ルーミアは笑う。

「アハハハハハハ！いいよアーシア！心優しい君がこんなエグい攻撃方法思いつくなんて思ってもみなかつたわ！…でも残念」

警戒するアーシア、しかし遅い。

ルーミアが放っていた魔力球がアーシアの頭部に直撃、気を失った。

残り動けるのは朱乃と一誠。

「ここまで、ダメージを受けたのは初めてだから。面白い技を見せてあげる」

闇符「ダークサイドオブザムーン」

ルーミアを中心に闇のドームが現れ、二人を飲み込む。

闇の中は、静かで何も見えなくて、自然に囲まれた場所だったのに匂いすら感じない。

一誠は闇の中で、恐怖に怯えながらも周りを警戒する。

すると、赤い弾幕が目の前に迫ってきていた。慌てて回避する一誠。なんとか回避したが、少し遠くにルーミアの姿が一瞬だけ見えた。

その瞬間。

黄色の弾幕が視界を埋め尽くし、避けきれずに弾幕を受け気絶した。

朱乃は空を飛んでいたせいか、この何もない空間で、上下左右の方向が狂わされ、飛んでいるのか落ちているのかさえ、分からない。

そして、朱乃の前に赤い弾幕が迫る、魔力球を生成しながら相殺しながら避け続ける。

全て避け切ったと安堵した瞬間。

「ミーツケタ」

ケタケタと笑う口

輝く紅い瞳

そして、黄色い弾幕の壁

全弾幕を喰らい、少しやり過ぎたのか、気絶した朱乃は少し湿っていたどことは言わないが。

全員が目を覚ますし、ルーミアが笑いながら話しかけた。

「いやーなかなか良かったよ。私にダメージ与えるとか中々出来ないからね。よし1回目も終わったし罰ゲームを発表しマース！」

「え？1回目？罰ゲーム？」

リアスがキョトンとしながら尋ねる。

「うん、だってまだ、午前中の9時半だよ？夕方まで戦闘する予定だからそのつもりでいてね？」

ここで数名があまりの厳しさに膝をつく。

「あと罰ゲームだけど」

・リアス（被弾回数2）

↓被弾数×10の恥ずかしい写真を再度撮られ、サーゼクスに送られる。

・朱乃（被弾回数46）

↓被弾数×1日、学校内でハイテンションに過ごす。（若干キチガイ気味に）

・小猫（被弾回数7）

↓被弾数×1日、おやつ禁止。

・アーシア（被弾回数1）

↓被弾数×5個、回復の魔力球を増やす。

・祐斗（被弾回数8）

↓被弾数×1日、学校で中二病を演じてもらう。

・一誠（被弾回数41）

↓被弾数×1週間、エロ禁止。

これを聞いた全員が膝をつき絶句する。

「被弾数はまだまだ増えると思うから死ぬ気でやろうね♪」

悪魔の言葉に全員が絶望した。



なテンションが保てるのでしょうか？それよりも私の精神が持つのでしょうか？私は社会的にダメになるかもしれないわね。フッフ、アーツハツハツハツハツハツハ!!いいわこのテンションよ！これを続けるの！さあ、やりましょう始めましょ行きましょどこまでも！アハハハハハハハハハハハハハハハハツツツツ!!」

俯きながら、普段の微笑みを消し、目を見開きながら自問自答して、高笑いする朱乃。

「あつ、月闇姉さま。このお菓子は私のですよ？甘くて美味しいですから一緒に食べましょう？ふふふ、口元にクリームついてますよ？慌てなくてもお菓子はこんなにコーリーーんなにツ！いつぱああいあるんですよ！美味しいです美味しくて涙が止まりません。：あれ？どうしてでしょう？こんなにお菓子食べてるのにお腹が膨れない：お腹が空きます。食べても食べても：えへへ：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子：お菓子（ry」

いつもは口数の少ない小猫が、虚空を見つめ、虚空に話しかけ、虚空を掴み口へ運ぶ。虚ろな目が限界さを物語っている。

「ふふ、見てくださいルーミアさん50個の同時操作が可能になったんですよ？これ以上はもう：でも、あと530個操れるようにならないと：」

声は聞こえるが緑の光球で包まれており、目視できないアーシア。

「中二病…厨二病か…いや、高二病？………わ、我は……くっ……。『剣を握らなければ、おまえを守れない。剣を握ったままでは、おまえを抱き締められない』これか…こんな感じなの…かな？『何故もがき生き





「一体どんな修行を…いえ、いいです。聞きたくありません。どうせ、とんでもない内容でしょうから」

「罰ゲームを用意してあげただけよ。私の攻撃に被弾した分だけ罰ゲームが厳しくなるようにね」

「罰ゲーム、ですか？」

スツとルーミアから紙が渡される。その内容は。

・リアス（被弾回数158）

↓被弾数×10の恥ずかしい写真を再度撮られ、サーゼクスに送られる。

|| 1580枚

・朱乃（被弾回数233）

↓被弾数×1日、学校内でハイテンションに過ごす。（若干キチガイ気味に）

|| 233日

・小猫（被弾回数204）

↓被弾数×1日、おやつ禁止。

|| 204日

・アーシア（被弾回数116）

↓被弾数×5個、回復の魔力球を増やす。

|| 580個

・祐斗（被弾回数241）

↓被弾数×1日、学校で中二病を演じてもらう。

|| 241日

・一誠(被弾回数379)

↓被弾数×1週間、エロ禁止。

|| 379週間 || 2653日 || 7年98日

書かれた内容を見て思わずうわ…と言ってしまったのは悪くないと思う。

これは酷すぎる。

一誠など7年以上の禁欲生活だ。ぶっちゃければオ禁である。

人間より欲が強い悪魔が三大欲求の一つを耐えられるわけがない。それを見越してか、

「安トゲフン、罰ゲーム絶対。契約のお呪いもバツチリ」

悪魔だ。ここに悪魔以上に悪魔な妖怪がいる。

そう考えていると『パンパン』っとルーミアが手を叩き。

「お前たちに嬉しい情報を与えよう」

絶望していた皆がルーミアを見る。一誠以外。

「罰ゲーム撤回ルールを追加だ！今回のゲームにて、相手の眷属を2人以上倒せば被弾数を1にしてやる！さらに！一番多く倒した者とライザーを倒した奴には罰ゲームなしだ!!」

一誠の頭を打ち付ける音が消えた。

みんなの目に光が灯り、続けて幻視させるほどに、相手へのやる気の炎を瞳に灯す。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!!!!』

6人の叫び声が響き渡る。

というか、怖い。全員殺る気だ。

ライザー陣営を血祭りにあげる想像が容易にしてみました。

それぞれが叫ぶ。

「アーツハハハハハハ!!ライザーに申し訳ないけど私のために死んでもらうわ!!」

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふ。焦がしてあげる引き裂いてあげる私の生活のためにも皆殺しよ!!」

「一人倒せばお菓子。二人倒せばお菓子。三人倒せばお菓子。四人倒せばお菓子。五人倒せばお菓子。六人倒せばお菓子。七人倒せばお菓子。八人倒せばお菓子。九人倒せばお菓子。十人倒せばお菓子」

「えへへ♪ルーミアさん私頑張っちゃいますね?みんなにデスヒールかけてきますね?期待してください♪」

「ククク、今こそ我の真神煉獄剣を見せる時が来たようだな!我が魔剣のサビとなってもらおうではないか!!」

「ぽーぽーぽーおっぽい?おっぽい!!おっぽおおい!!!」

「やばいwww何これ楽しいwww」

私はそつと目を逸らした。

だが、現実残酷だ。開始時間になったのだ。

これから犠牲になるライザーの陣営には申し訳ないが、骨は拾ってあげましょう。残ればですけど…。

こんな時、ダメージを受ける祈りが出来たらよかったのに。  
全員が転移し、ゲ<sup>殺</sup>ームが<sup>戮</sup>始まる。

## 21話

「みんな行くわよ！まずはそれぞれで、2人倒しなさい！全員が倒し終わったらそこから恨みっこ無しの早い者勝ちよ！突撃iiiiiiiiiii!!!」

指示を出し、叫ぶリアス。

「ズタズタのグチャグチャの挽肉にして私の雷でこんがり焼き殺してあげますわ!!」

物騒なことを言いながら飛び立つ朱乃。

「魔女の微笑（デス・ヒール）の実験に行ってきますね！」

優しい笑顔を浮かべながら駆けてくアーシア。

「私の魔剣の切れ味を知りたい者よ！我と正々堂々勝負!!見敵即斬!!取り敢えず斬ってから考えるぞおおおお!!!」

中二病なのか何なのかよく分からない事を叫びながらその場から一瞬で姿を消す祐斗。

「…イツセー先輩。お菓s、行きますよ。皆殺しにしましょう！お菓子のために!!」

「イツセー、あなたに掛けた封印を少しだけ解いたわ！全力全壊で行きなさい!!」

「ぽー!!ブーステッドギアぽー!!行くぽー!!」

小猫と一誠が駆けていき、リアスも遅れて飛び立つ。

「ふひっ……ッ!……くふっ……ふふっ……ッ!!」

そして、肩を震わせたルーミアが残った。

旧校舎から出たアーシアは鼻歌を歌いながら歩く。

そこへ、

『待つにゃ』

現れたのは『兵士』である猫耳を生やしたニイ、リイだ。

「早速だけど僧侶は厄介だから倒させてもらうにゃ!」

「私たちに会ったのは不運と思いなさいにゃ!」

さて、不運なのはどちらなのだろうか?

まずはニイがアーシアへ右突きを当てようと腕を出す。

だがしかし、右腕はアーシアの左手で絡み取られ、右の掌底がニイの顎を打ち抜く。

「なっ!?!」

油断したリイはアーシアが瞬時に展開した緑の球、癒しの魔力球への反応が遅れ、緑の光に包まれる。

リイは体をガクガクと震わせた後に全身から血を吹き出し、光となって消えた。

倒れたニイも気絶し、遅れて消えた。

「えへへ♪殺っちゃいましたよルーミアさん？私が一番です。褒めてくれるでしょうか？」

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」二名、リタイア』

笑顔でスキップしながらアーシアは、一旦拠点へと戻る。

一方、体育館では、小猫と一誠が敵と相対していた。

「小猫ちゃんは棍の子と、戦車倒しちゃってぽー。俺はチェンソー二人を相手にするぽ」

「…わかりました。獲物取らないでくださいね」

和服を着た棒術を扱う少女ミラが小猫を攻撃するが、体育館の床が爆ぜ、一瞬で懐に入った小猫が魔力を纏った拳で殴る。

ミラは咄嗟に棍で防ごうとするが、拳が当たった棍はあっさり折れ、そのまま腹に拳が当たる。

ゴッドンツ!!

生身が出す音ではありえない音が響き、ミラは床を連続でバウンドし、壁にぶち当たる。

戦車の中華風の少女雪蘭シュエランは一瞬の攻防に固まった。

その好きを逃すまいと、小猫の拳が雪蘭へ向かうが、すぐに避け、拳は壁に当たる。

ゴドオツン!!

体育館の壁が一発の拳で吹き飛んだ。

雪蘭は紙一重で避けた拳と壁を交互に見て顔を青くして震えている。

「あ、ま、まっつ」

停止の声は無視。慈悲はない。

雪蘭の顔面を殴り抜き、ミラと同じく吹き飛ばされた。

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」一名、「戦車」一名、リタイア』

「…お菓子ゲット」

小猫は場違いなセリフを漏らし、一誠の方を見る。

『解体しまーす♪バラバラバラバラ!!』

ギユイイインとチエンソーを振りながら近づくTシャツとスパッツ姿の双子姉妹イルとネル。

小猫の戦闘を見て、顔を青くしているが、こちらへ来ないと分かる。と目標の一誠を倒しにかかる。

だが、運の悪いことに顔を青くしている間に一誠の準備は終わっていたのだ。

ソフトボールほどの大きさの3つの赤色の魔力球が一誠の周りに浮いている。

「三連…ドラゴンショットオオオオオッ!!!」

『えっ?』

ゴツゴツゴオオオオオオ!!!

巨大な赤色を帯びた砲撃は、体育館を半壊させながら双子姉妹を飲み込んだ。



『ライザー・フェニックスさまの「兵士」二名、リタイア』

アナウンスが響き渡り、

『ライザー・フェニックスさまの「僧侶」一名、リタイア』

すぐに別のアナウンスが響く。

誰かが倒したのだろうと二人は話す。

倒した二人は移動しようとし、二人はその場から飛び退く。

直後に、爆発が起こる。

「ふふふ、惜しかったわね。大人しく倒されていれば楽だったものを」

悪魔の翼を出して空を飛んでいたユーベルーナが話しかけてくる。

それに一誠は、

「…お前…不意打ちなんて…なんて…なんて事をッ！」

「あら、どうしたの？これも立派な戦りやk「喰らったら罰ゲームどうなると思っただ!!」…え？罰、ゲーム？」

「もし、もしだぞ、今のに反応できずに喰らってみろ『情けないわね！0倍逝つとく?』ってなるんだぞ絶対！あの悪魔より悪魔らしい妖怪なら絶対にやる！そんなことも知らないで、俺らに、うおおおおお!!」

一誠は思い出した恐怖からか号泣していた。

一緒にいた小猫は、

「弾幕が…暗闇が…嫌！嫌々いやあああああ!!もう、被弾回数増やしたくないよおおお…：月闇姉さまお慈悲を…」

こちらは何やらトラウマが発動したのか叫んでいる。

ドン引きしていたユーベルーナは空からの攻撃に反応が遅れた。

体育館を飲み込むほどの大きさの巨大な雷の魔力球が降ってきた。

気配をいち早く察知した一誠と小猫は先程までの悲鳴が嘘のように迅速にその場を離れた。

ゴロゴロバチバチゴロドゴオツオオオンツ!!!!

「いやあああああああああああ!!!」

甲高い悲鳴と共に飲まれた。

『ライザー・フェニックスさまの「女王」一名、リタイア』

「うふふふふ、二人目もこんがり焼けましたわ」

朱乃も先程、僧侶を倒したのと合わせて目標を達成していた。

残るライザー陣営は兵士3、騎士2、戦車1、僧侶1とライザーの8人。

＋－レイヴエル side－＋

ユーベルーナがやられた。

情報と違いすぎる。一体彼らの能力向上に何があったというのかしら。

校舎の陰に隠れながら様子を見てると、後ろから声がかかる。

「へー、まあまあ戦果ねえ。あの子達まだ魔力操作が粗いわ、要特訓

ね」

私の後ろに、情報にあっただけ危険人物である月闇ルーミアが立っていた。

驚いて距離を取ろうとするが、

「ああ、攻撃しないから安心してちょうだい。一緒に観戦しましょうよ」

敵意はないようだ。

油断はできないがお兄様が「会ったら逃げろ。戦えば瞬殺されると思え」って皆に言っていた程だ実力は相当なものなのだろう。

聞いただけでは分からなかったが、相対すれば嫌でも分かる。

危険

目の前の存在はフェニックスの回復力だろうと、容易に越える攻撃を仕掛けてくるだろう。敵対＝死。だから、私は素直に彼女の言葉を受け入れる。

「わかりましたわ。それでは、『ライザー・フェニックスさまの「兵士」二名、リタイア』…」

話している間にも味方が削られていく。

「リアスがヤったみたいね。祐斗も今、騎士二人と戦ってるみたいよ。そっちへ行きましようか?」

「…ええ、わかりましたわ」

彼女と校舎の屋上へ行くと、グラウンドが見渡せ、3人が戦ってい



その瞬間に、

燃える魔力の炎でできた消滅の雲が

放電を繰り返す無数の巨大な雷球が

50を優に超える、絶望の緑の玉が

校舎から切り取った、複数の瓦礫が

赤く点滅する、ドラゴンの魔力球が

空に創造され、浮かぶ大量の魔剣が

死と絶望を織り混ぜた破壊の嵐が落ちてきた。

響く轟音、破壊の音が辺り一帯すべてを包み込み、私の側にいる女の子以外のライザー陣営は校舎と共に消え失せた。

あつぶね！結界を今までの中で最高の物にしていなかったら、一緒に消えてたかも：まあ、再生するだろうが。

しかし、この光景を見て腕の中の子は震えている。

私は大丈夫と言いながら頭を撫でてあげた。震えは収まったのか涙目で私を見上げてくる。

うわやばいこれかわいい

少し強く抱きしめようとするとアナウンスが鳴る。

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」一名、「戦車」一名、ライザー様、リタイア。よつてこの勝負、リアス様の勝ちです』

アナウンスが終わり、魔法陣が展開され、部室へ戻る。  
もつと愛でたかったのに、残念だ。

ちなみに倒した人数は

・リアス（2人）

「兵士」2名

↓シユリヤー、マリオン

・朱乃（3人）

「女王」1名、「僧侶」1名、「兵士」1名

↓ユーベルーナ、美南風、ビュレント

・小猫（2人）

「兵士」1名、「戦車」1名

↓ミラ、雪蘭

・アーシア（3人）

「兵士」2名、ライザー

↓ニイ、リイ、ライザー

・祐斗（3人）

「騎士」2人、「戦車」1人

↓カーラマイン、シーリス、イザベラ

・一誠（2人）

「兵士」2名

↓イル、ネル

・ルーミア

「僧侶」1名確保

↓レイヴェル

それぞれで、2名は倒していたので全員被弾数は1に、3人倒した奴は罰ゲームは抜きとなった。

流石の私も、あの一斉攻撃の中で、倒した奴ら見るのは骨が折れた。こうして、ライザー陣営とのゲームは一方的な虐殺として幕を下ろした。

## 22話

私はライザー陣営がいる医務室へ行く。  
もちろんリアスたちも連れてだ。

医務室へたどり着くと、治療中のみんながおり、私は、治療しに止められるがそれを振りほどきライザーの元へ向かう。

「やあ、ライザー。体の調子はどうだい？」

「ああ、気づかない間に再生追いつかないくらいボロボロにされてこのざまだよ…」

「悔しいか？」

「それは勿論。今までにない位にやられたんだ。悔しいさ…体が言う事きけばもう一戦やりたいぐらいに…。それぐらい、リアスは諦めるには勿体ないからなあ…」

「言質とった♪」

「えっ」

ルーミアがトンと足で床を叩くと、魔法陣が広がり、ライザー陣営とリアス陣営の傷や体力が回復していく。

「もう一戦してあげるわ。私VSアナタ達全員でね」

全員が呆然としている。リアス陣営が顔を青くしている様な気が



するが気のせいだ。

「ライザー。アナタ指導して欲しいって言ってたじゃない。だから稽古つけてあげるわ」

再度、足で床を叩くと、魔法陣が広がりフィールドへ飛ぶ。

フィールドは先程と同じで駒王学園を模したもの。

先程の戦闘中に解析して再現したのだ。

おっと、慌てて観客としてサーゼクスたちが屋上へ飛んできたな。

私はグラウンドの真ん中に転移し、リアス陣営とライザー陣営は部屋と生徒会室へ飛ばしている。

『あーあー。んじゃあ、今から開始するから全力で来ないと死ぬからねー。1時間は持つてね』

開始の合図として、手の平に魔力を集め旧校舎を吹き飛ばした。

予測していたのか、吹き飛ばす前にリアスたちが形振り構わず校舎から出てきていた。犠牲者はいないようだ。チッ。

そして私はまだ油断しているのであろうライザー陣営のいる生徒会室に、

「マスタースパーク」

虹色の光の奔流がレーザーとなって生徒会室を貫く。

だが、その攻撃の途中で朱乃の雷がぶつかり少し逸れた。

ふむ、半分は破壊できたな。

『ライザー陣営、「僧侶」一名、「兵士」三名タオサレマシタ』

アナウンスが流れる。

音声は棒読みちゃんを使っている。なんか違和感が…まあ、いい

か。

リアス陣営が動き出した。

祐斗が地面に次々と魔剣を生み出し、それを小猫が投げ、朱乃が魔剣に雷を纏わせる。

それを避け、払っていると、リアスと一誠が力を溜めている。

『Dragon Booster Second Liberati  
on!!!』

あれ？一誠の神器が少し変わった。

一誠はリアスの背中へ触れ。

『ブリステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物！Transfer!!』

リアスの魔力が増幅し、それをこちらへ撃ってきた。

あれは少しやばそうだ。

そう思い、横へ移動しようとする。

『ソード・バース魔剣創造!!』

地面から魔剣が創造され、足に突き刺さる。上にとえば巨大な雷が落ちてきた。

直撃。魔剣を引き抜き、リアスの魔力に対応しようすると、緑の光が私を包む。

体から血が噴き出し、回避が遅れる。

そして、リアスの攻撃が直撃した。

ドゴオオオオオツツ!!!

「まさか、殺っちゃったかしら…?」

完璧なコンビネーションで必死になって攻撃を当てたが、いくら何でも上級悪魔が消滅するレベルで放った攻撃が直撃したのだ、生きるほうがおかしい。

やり過ぎたかと思っっている中、攻撃によって砂塵が舞っていたが、それが吹き飛びルーミアが姿を現した。

全身から血が吹き出て、肌はボロボロに焼き爛れ、右腕は肩から無くなり、左腕は肘から先が無い。

「クツ、アハハハハハハハッ!!!いいね、いいねえ!それでこそ殺りがいがある」

笑い声を上げながら叫ぶ彼女は、高速で肉体が修復されていく。

これはマズイと思い、攻撃の指示を飛ばそうとして、彼女が祐斗の目の前にいた。

驚き、一瞬硬直した祐斗は、ルーミアの魔剣によって心臓を突き刺され地面に叩きつけられる。

ドゴツ!!と音が鳴りそこにクレーターができる。

そのまま祐斗が光となって消える。

子猫がルーミアに踏み出そうとして、素手で胸を貫かれる。貫いた右手でそのまま頭を持ち。

月符「ムーンライトレイ」

手からレーザーが放たれて小猫が焼かれ、光となる。

『リアス陣営、「騎士」一名、「戦車」一名タオサレマシタ』

「少し本気出した程度でこの程度か?」

アーシアが攻撃をするためにデスヒール用の緑の球を出すのが、

「アーシア、球を作るのは初級段階だ。上を目指すなら神器内で作り出し、相手へ飛ばさないと、こうやって対応されるぞっ。」

魔球を掴みそのまま自分の後ろから来たニイとリイの猫娘へ叩きつける。

『ライザー陣営、「兵士」二名タオサレマシタ』

「さて、実際に体験してご覧なさい?」

残っていた魔球を全てアーシアへぶつける。

アーシアは血だらけになり倒れた。

『リアス陣営、「僧侶」一名、三名タオサレマシタ』

アナウンズと同時に魔力の身体強化で近づいてきたミラと雪蘭。

「甘い」

ミラの棍を捌き、隙を狙って殴りかかってきていた雪蘭へと逸らす。

「なっ!?!」

「がはっ!?!」

ミラへ掌底を当て、雪蘭と一緒にある程度飛ばす。

飛ばした先には残りのライザー陣営がおり、リアスたちもそちらへ集まる。

「さてさてさーて? 多少人数も減ってきたし、一掃するためにも少し



「部長任せてください！俺が十秒で月闇を倒します！」

「ほう、大きく出たな。やるだけやってみなさい！」

『プロモーション』！『女王』！」

一誠が最強の駒に昇格する。

だが、その程度では足りない。

「俺はな月闇！剣の才能も、魔力の才能も、バカ力や治癒の力だってねえ！だがな、俺は！この最強で唯一の武器でお前が神様クラスだろうと倒し、お前を超える!!」

一誠が叫ぶ。

今の私は口元がにやけているだろう。

さあ、一誠。お前はどんな力を見せてくれる？

「輝きやがれええええツツ!!オーバーストオツ!!」

『Welsh Dragon over booster!!!!』

一誠の籠手の宝玉が赤い閃光を解き放つ。

周り一帯を赤い光が覆い、一誠が真紅のオーラに包まれる。

『この力を使ってみる。ただし、十秒だ。それ以上はお前の体が保てない』

「ああ、ドライグ！月闇に一発ぶち込もうぜ!!」

叫んだ一誠が赤いオーラを放ちながら一瞬で私の懐に入ってきた。

腕をクロスし防ぎ、距離を取る。

「へえ、鎧か。カツコイイじゃない」

「これが龍帝の力！バランスブレイカー・ブーステッド・ギア・スケルトンメイ禁手、『赤龍帝』の鎧。俺を倒したいなら魔王クラスの攻撃でも放ちやがれ！何しろ『禁じられし忌々しい外法』らしいからな！」

「お望みならやってやろう」

闇符「闇夜の強襲」

一誠の上空に闇を圧縮して圧縮して巨大な球状となった闇が落ちてきた。

とっさに両手に出した魔力を一誠は放つ。

ここいら一帯を破壊尽くす予定だった闇は一誠の魔力と拮抗し相殺した。

そのまま一誠は瞬時に移動し、ルーミアに拳を放つ。が、腕を掴まれ、地面に叩きつけられる。

闇符「穢れた死」

ルーミアから闇が溢れ出し、自分ごと爆発した。

一誠は鎧が少し砕け、息が上がっている。残り5秒。

時間がないことが分かっている一誠は再度私に拳を突き出してくる。

私が腕を掴み、先程と同じように投げようとする。

掴んだ右手の平に魔力球が出来ており、左にも出来ていた魔力球を合わせ、私に放ってきた。

咄嗟に庇ったが、右腕が吹き飛んだ。





魔力開放！

結界内のフィールドが跡形もなく消えた。  
ついでに一誠たちも。

## 23話

「ごっ主人ー！アーシア！お茶を入れたにや♪飲んで飲んで♥」

「ん、だいぶ入れ方上手くなったわね黒歌。美味しいわよ」

「ぽかぽかですー」

「アーシアの日本語の勉強手伝うのもいいけど休憩も必要にやよ？」

「ああ、今日は午前だけ勉強したら一誠の家に遊びに行くから大丈夫よ」

「えー…私もそろそろ外行きたいっすよー」

私の膝の上で抗議してくるミツテルトに。

「私の影なら空いてるわよ？」

「無限龍が住み着いてる影なんておっかなくて入れないっすよ…」

「そうね食われるかもね」

「食われるっすか!?!」

「我、烏より鶏が、いい」

私の肩に影から出てきたオフィスが顎を乗せながら話しかけて

くる。

可愛い子に囲まれて癒される。

「ウチ鶏に負けたっすか!？」

「あー確かに鳥よりかは美味しいわよねー」

「え、ルーミアさん食べたことあるんですか?」

「昔近くに人間ひといなかった時に空飛んでるからガシツ!ムシヤアつてよくやってたわ」

「月闇姉さまワイルド…」

「まあ、最終手段だったけどねー1回食事したら1週間は普通に過ごせてたから」

私って調子に乗っちゃうと人里の人間全部仕留める悪い癖があったからねー。

400年くらい続けてたら紫に見つかったんだっけ?いや、退治屋やら陰陽師の連中が定期的にやってくるから食糧不足が解決した頃だったかしら?見つかったのは。

あの頃のはロリ紫だったから可愛かったなー攻撃はえげつなかったけど…。

「ご主人が今までで、一番美味しかった動物って何にや?」

あーうん、何だったかな?食べごたえあって、脂も程よく乗って生でも美味しかったのはー…。

……………

…  
…

「…恐竜かなー？」

「にや、にや？え、なんて言ったにや？」

「恐竜、今で言うならトリケラトプスが美味だった」

「…姉御の話が壮大すぎてついていけねっすよー…」

「テイラノザウルスは大きかったですか？」

「…突っ込みどころが違います」

「大きいけど、味はそこそこだったわ」

「恐竜、竜？我の、親戚？」

「オフィスも言うことはそれかにや…」

午後

一誠の家に行くために軽く準備して向かう。

「アーシア、小猫準備できたー？」

「ハンカチ持ちましたよルーミアさん！」

「お菓子もばっちりです月闇姉さま」

「私も準備完了かな？ハンカチあるし小銭も少々、オーフィスも影に詰めたし、ミッテルトの鳥小屋も閉めた。うん、バッチリ！」

バッチリじゃないつすよおおお!!!つと何やら叫び声が聞こえたが無視して歩き出す。

道中は何事もなく一誠宅へ到着、そして。

「で、こっちが小学生の時のイツセーなのよ！」

「あらあら、全裸で海に」

「子供じゃないと変質者で逮捕されるわね。今の歳でやるんじゃないわよ一誠」

「やるか!!つて、母さんも見せないで!!」

最初は会議の予定だったのだが、一誠の母親がアルバムを持ってきたことにより崩壊した。

「…イツセー先輩の赤裸々な過去」

「小猫ちゃんも見ないでええええええ!!」

顔を真っ赤にしながら叫ぶ一誠を無視しながらアルバムを捲る。

どうやらこの母親は「いつか、女の子のお友達が沢山家に来たら、イツセーのアルバムを見せてみたいと思っていたの！」とのこと。

まあ、このオープンスケベがモテないことから儂いものだと思われるていたようだが。よかったな一誠。私は黒歴史や男の宝物エロ本を漁る。

おや？リアスが一誠の幼少期の写真を穴が開くほど見つめて固まっている。



ちよつと、後遺症が残ってるだけだ。  
すると、木場が一枚の写真で動きを止める。

「これに見覚えはあるか？」

声のトーンが変わる…変わったようなそうでもない様な感じだが、真剣に尋ねる木場。

「え、あ？うーん、いや、何分ガキの頃過ぎて覚えてないけどな…」

「この様な事がまさかあるとわなあ、思いもよらぬ場所で我の忌々しい思いの品を見るとは」

後遺sy(ry

「これは聖なる光つてゲフン！ゲフツゴホゴオホっ!!ぜ、聖剣だ、よ…」

戻ったのに締まらん奴だな…。

## 24話

カキーン

晴天の空に金属音が木霊する。

「ぐぼお!？」

輝く太陽、滴る汗、吹き飛ぶ一誠。

「へいへーい。男らしく球取ってみろー!」

「グローブでキャッチしてんのに体が吹き飛ぶような球打ってんじやねーよ!!殺す気か!!」

「叫び元気があるなら大丈夫ね。ほーれ、もう一回」

「ぎやあああああ!!!」

ルーミアが打つ球はバットに接触すると同時に亜音速で飛び、一誠のグローブに突き刺さる。受け止めきれずに派手に吹き飛ぶ一誠。ルーミアの修行を受けていなかったら今頃病院行きである。

ガキツ!ヒュボツ!ボツ!ボスンツツ!!!

「ぎやあああ!!ま、待てルーミア!ボツつて変な音が、今絶対音速超えてたよね!?!」

「この球は加速する!イグナイト!!」



「それ別のスポーツ、ぎやああああ!!!」

「ほれ、今度は祐斗だ!」

ガッ! ヒュボツボツボツ!!

「あら?」

祐斗に真つ直ぐ突き進むボールだが、本人はボケーと虚空を見つめており気づいていない。

「木場! 危nボゴンツ!! あゝ あああああああああああ……」

庇った一誠が悲鳴エコーを響かせながらグラウンドから退場した。

私は祐斗に近づき、

「祐斗。私は闇の妖怪。あらゆる闇に通じていて、心の闇にも敏感だ。お前の悩みは大体わかるが、あまり周りに心配させないようにね」

「……ルーミアさん、すみません。この闇は、まだ消えそうにないです……」

木場の感情は、怒り・悲しみ・諦め・不安・絶望・恐怖・罪悪感・憎悪・敵意・寂しさの負の感情が読み取れた。

過去のトラウマがこないだの聖剣と結びつき心を支配しているのが分かる。これはきつと復讐心。

心の闇とは厄介だ、増やすことは容易なのに減らすには時間がかかる。木場の復讐心は、私にはよく分かる。

だから、自分の手でどうにかするべきだ。

木場を見ていると思いつく、自分の復讐心を――への闇を。

次の日の昼休み。

球技大会も近い。今日も練習に参加するが、ドッジボールでもするか？

取り敢えず、お昼を食べたら部室で最後のミーティングだ。

ふと、考えていると一誠達の話し声が聞こえてくる。

「イツセー、お前な、変な噂が流れているから気をつけろよ」

メガネを上げながら元浜が一誠に話しかける。

「な、なんだよ、元浜……」

「美少女をとつかえひつかえしている野獣イツセー。リアス先輩と姫島先輩の秘密を握り、裏で悪行三昧のエロプレイを強要し、『ふふふ、普段は気品溢れるお嬢様が、俺の前では卑しい顔しやがって！このメス〇〇がっ！』と罵っては淫らにつぐ乱行」

「おおおおー！いいいいい！なんじゃ、そりゃあああああああ！！」

あまりの噂っぷり叫ぶ一誠。

「まだ続きはある。ついには学園のマスコットアイドル塔城小猫ちゃんのリリポデイにまでその毒牙は向けられる。小さな体を壊しかねない激しい性行為は天井知らず。まだ、未成熟の体を食う一匹のケダモノ。『先輩……もう、やめてください……』と切ない声も野獣の耳には届かない。そして、食欲なまでの性衝動は転校したての一人の天使にまで――。転校初日にアーシアちゃんへと襲い掛かり、『日本語と日本の文化、俺が特別補習で教え込んでやる』と黄昏の時間に天使を

墮落させていく…。ついには自分の家にまで連れ込み狭い世界で始まる終わりのない調教。鬼畜イツセーの美少女食いは止まらない―と、こんな感じか?」

「……マジか?お、俺、周囲にそんな風に見られているの?」

「アーシアのくだりは、桐生辺りが間違った常識教えてそうだけどな」

「げ…なんで分かったのルーミアちゃん…」

イタズラがバレた子供のように顔を歪め驚く桐生に。

「アーシアに堂々とそんなこと教えるのはお前くらいしかいないだろうに」

「確かに的を得ている…てか、俺の噂流したの誰だ!?!いったい誰がそんな噂を流している!?!」

「まあ、俺たちが流しているんだがな」

「うんうん」

元浜と松田が、悪びれた様子も見せずに堂々と告白した。

嘘みたいだろ?こいつら友達なんだぜ?

ゴツ!ドゴツ!

一誠が無言で二人を殴りつけた。まあ、怒るわなあ…。

「痛いぞ、鬼畜」

「そうだ、俺たちに当たるな、野獣め」

「ふざけんな！俺の悪い噂なんぞ流しやがって！お前らな！いつペン死んでみるか！」

「ふん。このぐらいしないと俺たちは嫉妬で頭がイカレてしまうぜ」

「ハハハ、すでに嫉妬でイカレてるかもしれないがな！」

お前らの頭はすでに手遅れだろう。

永琳あたりに頼れば変態に良く効く薬でも作ってくれないかしら  
…。

「ちったあ悪びれる！俺の学園ライフをどうしたいんだ、お前らは！」

「ちなみにイツセーと木場のホモ疑惑も噂で流れている」

「多感な性欲はついに同性のイケメンにまで！まあ、これも俺たちが流しているんだけどな」

「一部の女子に大変人気の噂です」

「それに便乗して私は元浜と松田のホモ疑惑を流しております」

「まてええええええええ!!!」

「なぜ俺たちの噂まで!?!」

「一部とは言わずに木場×一誠の噂と共に全校生徒に流しておいたわ」

「「「ぎやあああああああ!!!」」」

「ルーミアちゃん、やることエグいね」

「あと、一誠が私の服を破りとったって噂まで」

「事実まで混ぜてるうううう!!」

「近日中に私のファンクラブが一誠討伐計画とか企ててたわ」

「うわああああああ!!!」

ちやつかりゲーム時の仕返しも忘れない私である。  
スッキリしたわ。